

大原幽学没後門人の旧幕臣家族回想録

『佐藤家の人びと』の翻刻・紹介

Research Materials

樋口雄彦

大原幽学は幕末の農村改革指導者として知られるが、農民の門人集団とは別に、彼の死後その教えを受け継いでもう一つの流れとして武士・士族層の存在を見落とすことはできない。

明治維新後における旧幕臣を主要な担い手としたこの動きについて、これまで筆者は二つの論考を発表してきた。「大原幽学没後門人と明治の旧幕臣」〔『国立歴史民俗博物館研究報告』第一二五集、二〇〇六年〕、「大原幽学の教えを学んだ旧幕臣列伝」〔『ひかたの歴史と民俗』第八号、二〇〇九年〕である。使用した史料のうち主要なものは、旧幕臣門人グループの中心に位置した伊藤家に伝来した文書であった。同家に由来する書簡、日記などは質量ともに豊富であり、これまであまり注目されてこなかった、大原幽学の教え（性学・性理学・八石教会）と旧幕臣をめぐる諸事実を明らかにすることができた。

その後、新たにこのテーマに関連する貴重な文献の存在が確認された。本稿で紹介する『佐藤家の人びと』がそれである。これは旧幕臣・性学門人の家庭に生まれた人物の回想録であり、史料としてはあくまで二次的なものではあるが、当事者にしかわからない詳細かつ重要な内容を含んでおり、先述の二つの拙稿を大いに補ってくれる証言となっている。

資料原文を掲載する前に、簡単な解説を付しておきたい。

佐藤雪洞著『佐藤家の人びと』は、二〇字・二〇行の四〇〇字詰原稿用紙一四枚にペン書きされた原稿を電子複写し、二つ折りにしてA5判サイズで袋綴にし、活版印刷した表紙・奥付のほか、扉・口絵・付図などを付け加え製本した私家版である。執筆は昭和四三年（一九六八）一月一七日から八月一〇日にかけてであり、その年の秋、限定一〇〇部が作成され、親族間に配布された。副題に「井上・北角につながる覚え書」と付されているように、佐藤・井上・北角の三家がその親族の範囲であったと思われる。

著者の佐藤雪洞（一八九三―一九八六）は、本名を源作といい、長野県で教師・日本画家・俳人として足跡を残した人である。雪洞の経歴については、『伊那路』第四二七号・特集佐藤雪洞先生追想（一九九二年、上伊那郷土研究会）が詳しい。その父佐藤巳作は性学門人であり、佐藤家は一家そろって大原幽学の教えを奉じた家であった。佐藤家のみならず、同家の姻戚や遠縁にあたる北角・井上・入江・黒部・渡辺・宮田・伊藤・岡田といった旧幕臣諸家は軒並み性学の道友（門人）になっていた。『佐藤家の人びと』にも各家の系図が掲載されているが、本文で述

べられている関係を総合して表現すると別掲の系図のようになる。

二つの拙稿にも、性学を受容した旧幕臣の姻戚関係図を作成し、掲載しておいたが、本図によってさらに補強されたことになる。佐藤家を中心とした『佐藤家の人びと』と伊藤家を中心とした拙稿とが連結することで、つなげられずにいた諸家の系図がつながり、門人間の姻戚関係の深さと広さがより一層明らかになったのである。

具体的には以下のごとくである。拙稿での主人公であった伊藤家の人々、とりわけ東京における性学教会の事実上の最有力支持者ともいえる伊藤悦子（ゑつ）は、幕臣北角家に生まれた女性であったが、その実弟が佐藤為信（銓吉）であった。為信自身は神文を提出せず、正式な性学門人とはなっていないが、シンパとしてその活動を援助した。また、為信の息子・娘たちはそろって入門した。為信の長男が巳作であった。巳作の妻たみ（民）、すなわち『佐藤家の人びと』の著者佐藤雪洞の母は、幕府陸軍の工兵頭をつとめた井上元七郎（義通）の娘であった。元七郎は維新後早く若くして亡くなったが、その父井上如水（義斐・備

後守）や未亡人・遺児たちは性学に接近し、また入門した。井上元七郎の妹の嫁ぎ先である旧幕臣岡田家にも性学が広まった。

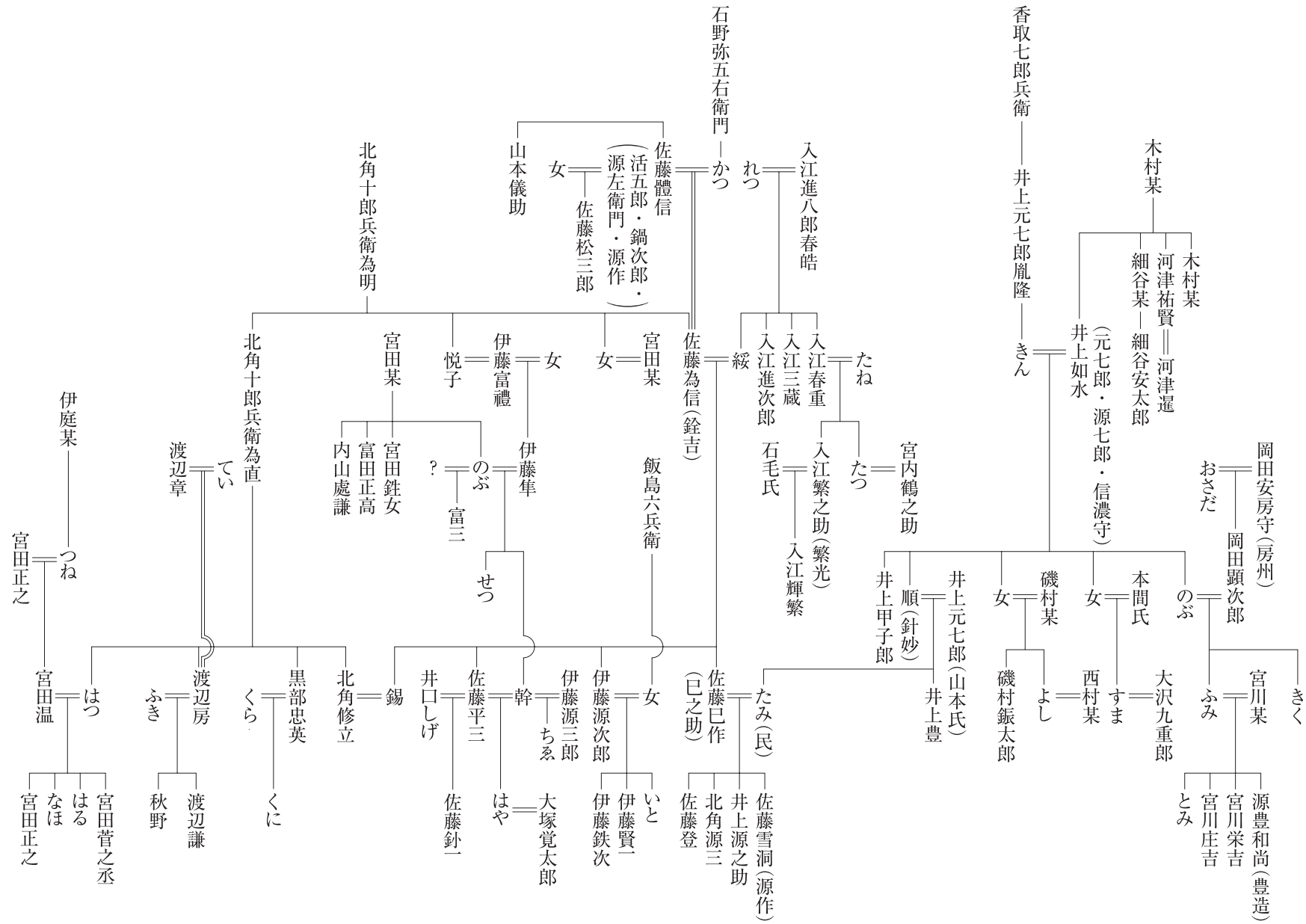
写真1 『佐藤家の人びと』

拙稿では、横浜語学所に学び沼津兵学校・静岡学問所に奉職、そしてフランスへの留学も果たした新時代のエリート青年であった伊藤隼が病気により挫折し、性学の世界に入っていく過程を、強すぎる母の下で苦悩する息子の姿として垣間見ることができたが、『佐藤家の人びと』からは伊藤家の複雑な事情がより明確に

なった。悦子は隼の実母ではなく継母であった。そして少年時代の佐藤雪洞がひそかに「西太后」と渾名を付けたごとく、やはり伊藤悦子は強烈な個性を持った女性だった。

佐藤家と伊藤家の間では、二重の姻戚関係が形成された。悦子と為信が姉弟の間柄だったほか、為信の三男（巳作の弟、雪洞の叔父）である平三は、伊藤隼の娘幹（もと）の婿となり一時伊藤家を継いだのである。平三と幹の間には娘が生まれたが、二人は後に離婚した。幹が亡くなった後、佐藤家と伊藤家との交際は絶えたという。そして、佐藤家側には雪洞の記憶が、伊藤家側には文書資料が残った。その後の長い年月を経て、伊藤家文書が伝える諸事実と佐藤家の回想・伝聞が伝える諸事実とは、本稿の中で再度出会い、融合することになった。

大原幽学記念館所蔵の大原幽学関係歴史資料に含まれる伊藤家文書は、書簡や日記などから成り、きわめて客観的な史料である。その半面、性学門人たちの信仰の内面や日常生活の実態をうかがい知ることは難しかった。ところが、『佐藤家の人びと』の記述には、門人たちの心の内



『佐藤家の人びと』の記述をもとに作成した系図
明らかな誤りもそのまま表示した

や日常について語り伝えてくれる箇所が少なくない。当事者にしかできない貴重な証言となっているのである。たとえば以下のような記述に注目してみたい。

父母ともに熱心な信徒の家庭に育ち、自身も小学校に入るまでは丁髷を結っていた雪洞であるが、その性学に対する視線はあくまで客観的である。三代目教主石毛源五郎に対する伊藤悦子の熱心な傾倒を「新興宗

写真2 元治元年(1864)に撮影された井上如水(義斐)の写真
『アサヒグラフ 臨時増刊 写真百年祭記念号』(1925年刊)に掲載

写真3・4 井上元七郎(義道)のガラス板写真とその箱蓋
井上敏子氏所蔵 元治元年(1864)撮影

教の信者特有の熾烈なものであった」とする。

自家の信仰の背景として、「維新に直面した時の江戸の武士達は、どの様にしてその俄に失はれた安定感を取り戻さんとしたか」、「三百年より所としていた幕府の倒れたあとの武士階級が、一私人として、其の心の生活のより所として中には藁をも掴む思ひで此の教会に入」った、「皆一度は出来ない迄も理想主義の性学へ入って、単純に救はれようと、ユートピアを夢見たものであったのかも知れない」、といった視点を打ち出している。このような理解のし方には十分首肯できる。

「俄かに頭はザンギリになり、昨日迄の下々の人間が無遠慮に物を言うようになり、足軽上りの官員が馬車に乗って横行する不愉快から、すべてを忘れようとするものの如くであった」、「儒教的な、或は国粹的なと云うか、反欧化主義とも言うべき消費中心の生活をして居た」、「獣肉を甚しく忌み嫌った事、後には砂糖の使用を禁じた事、服装の上では昔のまゝに丁髷を結っていた事、衣服に極端な制限をして、全部木綿だつきにし、女子の頭の如きも老若一様におぼこという或時期の江戸市民にとっては葬式の時の髪形であった事」、「感情の上では天皇の

名による新政府をも軽蔑して居た」といった記述は、性学門人集団が明らかに文明開化に反対する姿勢を意識的に貫いていたことを証明している。

雪洞が性学門人の意識と行動を客観視できた理由は、この回想録の執筆が明治維新から一〇〇年を経過した時点であり、明治も歴史の対象となるようなはるか遠い時代となっていたからである。なおかつ佐藤家自体が明治後期にはすでに性学から離れていたといういきさつもある。雪洞が小学校に入学した後、父巳作も鬢を切ったとある。本文中には、時代の趨勢とともに「反動的陶酔から醒める人達が出来て来た」、若者の間には「先づ明日の自分を如何にすべきかという事が何よりも切実な問題となり、同時に禁欲的な日常があきたらなくなりはじめた」と、脱退者増加の理由が述べられている。また、三代目教主石毛源五郎の時代には内紛が顕在化し、「親の代には感動のあまり無条件で教会へ差出した土地や財産に対して未練が生じ」、子の代に訴訟が頻発、それに対抗するために取られた原理主義的な動きは、「幽学の理想にははるかに遠い、むしろ夫れには無関係なもの」となり、「一種の末期的現象」が生まれていたとする。

早く脱退した者ほど経済的苦境からは逃れやすかったかもしれないが、離教した者も決して順調に社会復帰できたわけではなく、「父の五十前後は苦悶の連続であったと思はれた」と、父巳作の苦しみに思いをめぐらしている。

とはいえ、雪洞の筆致からは性学に対する恨みや悪意はあまり読み取れず、むしろ懐旧や哀惜の気持ちを感じられる。「客観的な悲劇の人々を、たゞ明治誕生の大浪に流された藻屑と見るだけで片付けてしまう事の気のどくさと、明治がよき時代であるならば、其のよさとは何であったかを嘯みしめて、其の由来する所の正義性とも言うべきものの残滓を反芻する気持も手伝って、此の一団の事共が書いて見たかった」とい

う箇所がそのことをよく示している。

攘夷思想を捨てきれずテロにはしり抹殺された志士たち、武士の特権にこだわり敗れ去った西南の反乱士族たち、「蒙昧」と誇られながらも旧慣を固守し開化を拒み続けた民衆など、近代化に抵抗した者の諸相はさまざまである。皮肉なこと、旧政権の担い手であった旧幕臣の場合、明治新政府の官吏となり近代化を推進する役割を果たした者が少なかった。彼らは仇敵である新政府に取り込まれたという側面もあるが、自ら新政権に食い込んで旧幕時代に中絶した政策を実行したという側面もあり、その点では近代化路線は幕府瓦解をはさんで継続していた。それに対し、東京のど真ん中で反文明的生活を続けた性学門人旧幕臣集団の存在は、ある意味ではストレートに明治政府に歯向かった、旧政権の生き残りにふさわしい姿を示していた。

ただし、なぜその抛り所が大原幽学の思想でなければならなかったのか。また彼らのうち少なからぬ者が幕府の中下級の実務官僚、洋学習得者であったという点はなぜか。最高の保守主義者は、上層・高禄の旗本や、儒学・国学を学んだ者だったのではないかと考えたいところであるが、むしろ性学受容者はそうではなかった。旧幕臣と性学の思想が結び付いた理由を完全に説き明かすためには、まだまだ検討が必要である。本稿がそのための一材料となれたのであれば幸いである。

末筆ながら、『佐藤家の人びと』の翻刻・紹介をお許し下さった佐藤紀代様、佐藤至朗様、佐藤正様、資料の閲覧、情報の提供にお力添えをいただいた井上稔様、北角晴男様、井上敏子様、佐藤澄江様、要伝寺、駒ヶ根市立図書館の皆様にご心より御礼申し上げます。とりわけ井上稔様には、二〇年前、性学の家とは知らずに、単に沼津移住旧幕臣のご子孫として連絡を取らせていただいたことがあった。今回再びお世話になる機会に恵まれたが、史料と史実が結び付けた機縁であり、とても感慨深かった。

- 翻刻にあたっては、以下の方法を採用した。
1. 手書きで記された原文をそのまま活字化した。旧字を新字に改めた部分もある。
 2. 改行や句読点は原文の通りとした。
 3. 本文の理解を深めるとともに、誤りを正す意味でも、原文にはなかった註を新たに付し、() 内の番号で表示し、末尾にまとめて記載した。

(表紙)

佐藤家の人びと

佐藤雪洞

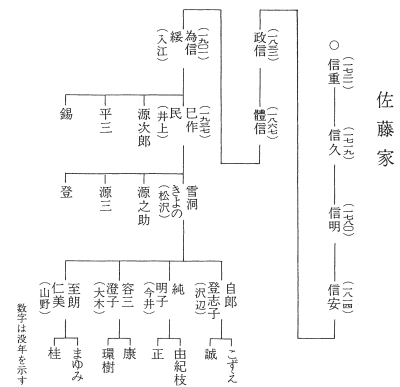
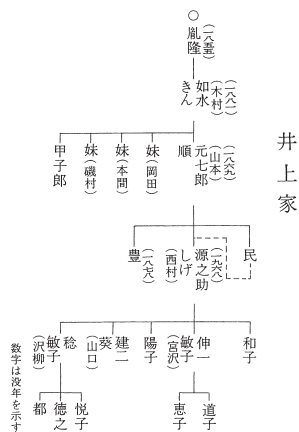
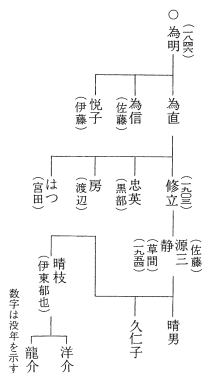
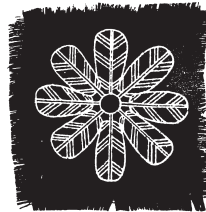
(扉)

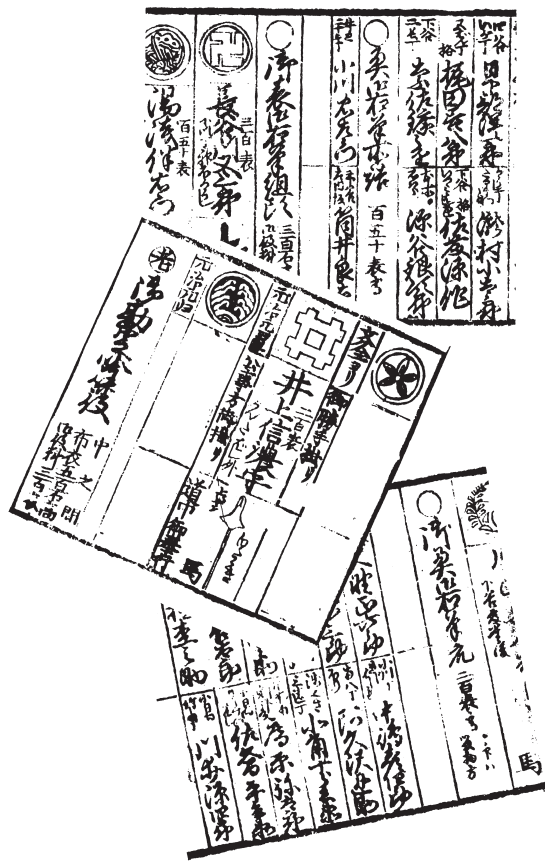
雪洞筆録

佐藤家の人びと

井上・北角につながる覚え書

附 三家の系図・筆蹟・明治初期の地図





かの 存まらざる
 河内物もさし
 何んかき入るりか
 今も何んかき入る
 ちひ入るりか
 今も何んかき入る
 ちひ入るりか
 今も何んかき入る
 ちひ入るりか

元治二年刊武鑑に見える三氏の名

與衆同好

靡不成

九十九
 鳳隆

上 佐藤源作體信の書翰 下 井上鳳隆の書
表紙 かな文字は北角為明の書

佐藤家の人びと。

— 井上北角につながる覚書 —

佐藤雪洞

佐藤兄弟と云つても、素より信夫しのぶのしょうじもとほるの莊司元治の子の、継信や忠信のことではない。自分と弟達とのなはしである。

昭和四十年の十月、私は長男夫妻に招かれて、井上源之助北角源三の二人の弟と共に、名古屋御園座の観劇に出かけた。そしてその次の日には此の年開村した犬山市の明治村を見物に行ったのである。

すでに七十二才になった自分と、古稀を迎へた井上と、これも六十七才になる北角にとって、明治村はなつかしいものであった。

明治になつてもなほ久しい間幕末の空気を残して生きて来た我が家、そしてその明治が終ると共に東京を離れた自分にとって、此の村の空気は故山に還る思いであった。

時たま〜我々兄弟の生れた家、そして又第二人が名跡を継いだ家について話し合つて見ると、一応年号が大正と改まると共に東京生活を打ち切つた自分の記憶が、一番明瞭であるらしいのである。これは引續いて東京に居住して居た二人にとっては、東京の目まぐるしい変貌が、古いものを記憶するいとまを与へなかつたからである。

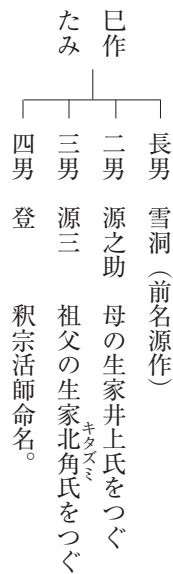
二人とも、夫れ〜孫のある年になつた弟達は、信州に移つた自分の脳裏に、今は標本化されて固定した、古き我が家につらなる思い出を、今の内に書きとめて置くように勧告したものである。

今日は四十一年の四月十七日の（昔なら父が年々上野の東照宮へ参拝した日で其の年月の長さは、御神酒を頂いた後頂戴して来た、葵の紋のついたかわらけの数でも想像された。）拂曉であるが、昨日曾て自分が何代目かの会長であつた、伊那美術協会の総会に出席して、芸術の氣の失せたその変容と、官僚の如くに事務的に煩雜に、且乾燥無味になり、個人的には年令差によつて、孫のドライ振りを見る祖父の如き味気なさを痛感した後の事なので、近く手術はするが結果はどうなるかはつきり

とせぬ白内障の眼が、まだかすみ乍らも見える内に、弟達の勧めに従って、思い浮ぶまゝを書き付けて置こうと思いついたのである。

今私は寢床の中に腹匍いになって、此のペンを走らせているのである。曾て一度書いておいたが、いつか紛失してしまつて、今となつては到底見当りそうもない家系のメモもあきらめて、そのような紛失も亦此の記録の一節と考へるようなゆき方で、これから思ひ出す俣に、縦横に向つて記憶の糸を辿らうと思ふのである。

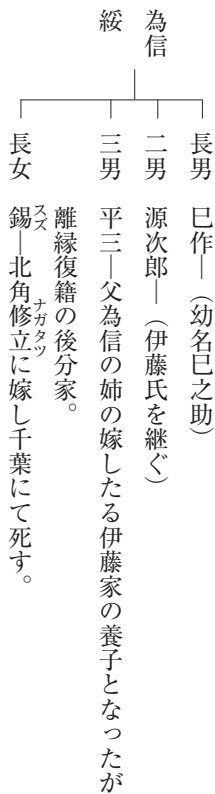
そしてその筋道は、我が家の家系の畧記とも云うべき過去帳があるので夫れを参考に自分達兄弟を振り出しにして書き記すことにするつもりだ。尚書いたものとしては此の外に家督相続の時に幕府へ差出した系譜の下書があるから、夫れらも参考にする。



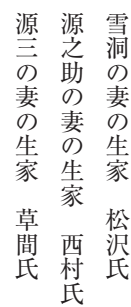
他の三人の名は石毛規方の命名。

此の佐藤兄弟の父巳作は幼名巳之助⁽¹⁾。銚吉為信⁽²⁾の長男で、母は入江氏であつたが、佐藤の家がその前二代子がなくて養子が続いたので、事実上巳作は此の家ではじめて生れた男子である。母のたみは井上元七郎の長女で、後に石毛源五郎規方の養女として佐藤へ嫁した。その縁で佐藤の三人兄弟の命名は、皆石毛翁の行はれたものであつた。

此所で我々の両親の近親関係を記すと次の如くなる。



此の様な関係なので、佐藤に近い親戚は祖父の生家の北角、祖母の生家の入江、母の生家の井上の三軒と謂ふことになるが、その後佐藤兄弟の配偶者が登場して来るので、夫れを記すと、

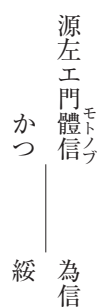


と言ふことになる。登は妻を迎へて居ないから、その関係はない。井上北角は、還元⁽³⁾の形で孫や子達⁽⁴⁾がその祖父なり母なりの生家を継いでいること別述の如くであるが、入江氏は別である。

これを佐藤とのつながりに於て畧叙すると次の如くである。

入江佐藤の關係は、安政二年の江戸大地震の年に（綏の話による。）当時十六才であつた綏⁽⁴⁾が銚吉（後に為信）に嫁いだことからはじまるが、為信は午の年だつたから十六才の綏の子年⁽⁵⁾から考へて二十一才であつたと思はれる。（天保五年の生れと聞いていた。）

その時の、わが佐藤の家の家族構成は次の如くであつた。



源左工門は前名を活五郎又は鍋次郎と称し最後には源作と云つた。これが曾孫雪洞の幼名になるのであるが、役は奥御祐筆で、同じ役の山本儀助の弟であつた。黒痘痕⁽⁷⁾のこわい顔の人であつたと言ふ事と、涙もろい人で忠臣義士の伝記などの古典を音読し乍ら涙を流したと言ふ事、碁を打ち乍ら亡くなつたと言ふ事などが伝はつて居る。妻かつは後妻であつて石野弥五右工門の娘と記されている。

孫の巳之助を非常に可愛がつたそうだが、此の石野の後は末吉という養子の時に倒産して（麴町で洋品店をしていたが、此の倒産は融通した資本の回収不能になつた点で佐藤の家に大分影響があつたらしい。現に先方でも夫れを気の毒がって債権者が手を打つ前に何とか佐藤さんの

分は別に所置したい、という内交渉があつて弁護士をたのむか、という話迄出たのだが、「重要な親戚が生へ立つて策謀して、他人様に迷惑をかけるのは心苦しい。」と云う事でその意見は撤回され、千両のかたに編笠と云うたとへの通り、その時の石野のかたみとしては小さな赤草の折靴が錠前の毀れたまゝ、永いあいだ箆の中にごろ／＼していたのがその結末であつた。後には愛知県(8)の知立に移住した。あいという娘があつたことまでがわかっている。

其の石野から来たかつと源作との養子が為信であるが、幕府の瓦解の前に養父の死に遭い、前將軍龜之助(後の家達)に扈從して多くの旧臣仲間と共に静岡へ移住した。その時已作はすでに生れて居り錫源次郎等もみな生れて居た事と思はれるがその頃の巳之助の友人に傍島某と云うのがあつたが、その娘の砂と云うのと、其の又弟の正雄というのが後に自分の入つた入谷小学校へ来ていた。

為信を家長とする一家が静岡に居る時に新日本の戸籍制度が出来たので、我が家の本籍はそれから後迄静岡市東鷹匠町無番地という事になっていた。⁽⁷⁾その鷹匠町という所をはじめて自分の眼で見たのは昭和二十三年頃自分の三男容三が当時の浜松工専を卒業した時、在学中世話になつた浜松市海老塚町の長谷川昌代さんの所へ禮に行つた時あべこべに久能山参拝に案内され、その時「此処が鷹匠町です。」と教へられたのがはじめてゝあつた。

明治五年に一家は再び東京へ帰つたという事で其時初めて鉄道の開通した横浜から新橋迄を汽車にのつた話が伝はっている。

何でも下りて家へ帰つてもからだか揺れている様な気がしていたそう

だ。一家は下谷の竹町十三番地(後に二十四番地になった。)に居を構へた。雪洞の生れたのは此の家であつた。爾来二十年余り此処に住んで居たわけだが、その後の為信は工部省の何等出仕とかいう小役人になつた

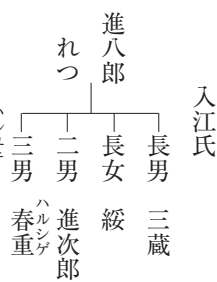
事もあつたらしい。⁽⁸⁾

工部卿井上馨と云う名の入つた辞令を曾て見た記憶がある。しかしこれはあまり長い間のことではなかつたと思う。

ウェートと言う英国人その他と一しよに撮つた写真、及びウェート一人だけの写真を見事昔見た事があつた。ウェートは何かの技師であつたらしい印象がある。⁽⁹⁾

この辺が僅かに匂つて居る佐藤家と新時代との接触であるが、夫れは又次に記すような事情から、大きく新時代と離れる事となつた。

此の辺で何時の間にか大きく迂回しはじめて、消えて仕舞いそうになつた入江との関係へ話を戻すが、綏の生家入江氏は綏を中心とする次の様な家族構成であつた。



進八郎は春皓と称し、楽人東儀氏の出であつたが入江家の養子となつた。算法に詳しく暦学にも通じていたと伝へられる学問の好きな人であつたらしく、其の遺愛品の中には間宮林蔵所持のコンパス(竹製)などがあつた。又北辺の地図なども何点かあつたのを後に佐藤に預けられた文庫の中で見た。夫れらと共に筆架(シテキ)などの楽器のあつた事も、その楽人の家の出である事を偲ばせるものであつた。⁽¹⁰⁾

(因に入江家の寺は当時牛込横寺町にあつた草刈薬師の寺とよばれた正藏院⁽¹¹⁾という寺であつた。入江家の定紋は四つ石に二つ星という珍らしい紋で、中をあけて上下左右に正方形を積み、その下段の左右に小さい丸を描いた紋で夫れが石塔にも刻んであつた。

(二月十七日記)

進八郎は巳作兄弟にとって母方の祖父であったから極めて当然の事ではあるが、みなその名つけ親であった事が命名の書類に残っている事である。「何がしと称せらるべし」と横二つ折、豎三つ折にした奉書に書いてあるのが今も残っている。しかし維新前に亡くなったらしくて、其の静岡ゆきは話題に残って居らない。

そして家女である進八郎の妻、即ち綏の母れつをはじめ子供達は姉の嫁いだ佐藤の家で暮す事が多かった様だ。長男二男共に早逝して、末子の春重⁽¹²⁾が家督をついだが、これが後の鶴見の汐田の入江繁之助（後に繁光と称した）の父である。

れつは家付女房で、春重が後に記す八石教会上の原出張所⁽¹³⁾に勤番をしたために、晩年は佐藤の家⁽¹³⁾に引取られて、曾孫の守などして居たが、日暮里元金杉の家で八十六才で亡くなった。

此の人に妹があったが一代嫁がず家に居て姉のれつがあまり細かいことには向かない性分を補って家事を助けていたと云うが、本名はわかっていない。甥達のよび名の「あっちゃん」と云う名だけが伝はっている。姪の婿である為信が俗用をたのんでやった手紙などが残っているが、極めて明るい性格で、昔の芝居見物の大が、りな支度などには、いつも此の人が中心人物であつたらしい。

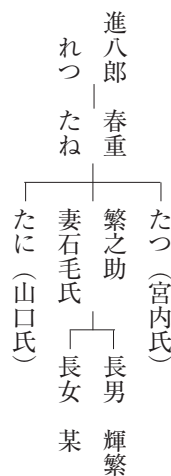
結局入江家は、春皓（進八郎）れつの間に出来た子供の内、綏と春重の二人だけが生き残って、綏は私達の祖母となり、春重は長男繁之助が鶴見に永住するに及んで、其処に引取られ、九十に近い高齢を保った。春重の妻は東海道上の原の人でおたねさんと言ひ矢はり八石教会の人であつた。

子供は女二人男一人あつた。長女たつは宮内鶴之助に嫁し興作と云う子供があつたが、三十代で亡くなった。二女たには同じく八石教会の一員で日暮里の丁髷炭団屋の仕事をはじめに、山口安貞⁽¹⁴⁾と夫妻に貫はれた。これは母のおたねさんが早く亡くなったためではなかつたかと思は

れるが、十才位でなくなつたので、繁之助一人が残つたわけだ。彼は土建業を営んだ関係で方々に出張していたが、家は鶴見に建て、住んで居た。

妻は石毛氏で千葉県の人、長男輝繁外一女があつた。繁之助の繁光は私より二三年年長であつたと記憶するが生真面目な男であつた。輝繁は大正末生れ位の年令である。

今記憶に残っている入江の家系を畧記すると次のようになる。



佐藤の家が血統的に北角入江の両家によって始まる事は前に書いたが、その意味で此の辺で北角氏に就て記すのが順序と云うものであらう。

北角氏

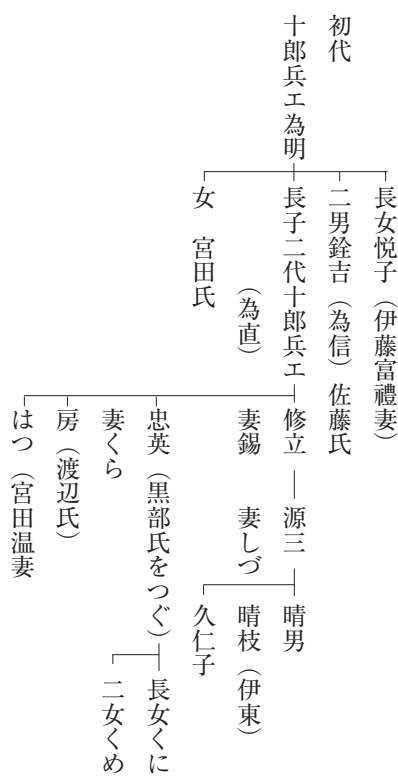
北角氏は後に記す修立^{ナガタツ}でもすでに十余代を算へる旧家で、その菩提寺である浅草の清光寺（浄土宗）にある墓碑によれば、その先祖の歿年は、寺の開基よりも古いのだ。⁽¹⁵⁾

しかし夫れは夫れとして佐藤との関係は北角十郎兵工⁽¹⁶⁾為直の弟である、銓吉が養子に來た事から始まるわけだ。

その縁組の動機は両家が共に徳川の奥御祐筆という役にあつた事と、銓吉が若くして亡くなった源作體信の子松三郎と親しかったために、松三郎の希望的遺言が実つて親友の家をついだものと伝へられている。

松三郎は若くして亡くなつたが秀才であつたらしく、彼の伝授を受けた剣道兵法等の巻物は曾て何巻も佐藤の家で見受けられた。その小口に金箔をおき水晶の軸をつけた美しい形は少年の自分の目に、何か厳しい印象を与へたものであつた。

そこで為信の生れた北角の人々について、記して見ると左の如くなる。



北角で生れた為信の姉悦子が伊藤富禮の後妻に行った事から、伊藤家は佐藤とも親族となり、更に為信の三男平三が悦子の義子隼の長女幹の養子となるに及んで、一層近い親戚となるのだが、先づ悦子の事を記す事にする。悦子は二代目十郎兵工即ち為直の妹であったが、兄妹中で一番性格が強かったようだ。

夫れだけに弟為信にとつても力になる姉であったと思はれる。はじめ小笠原家の家老某に嫁したが不縁となり、後伊藤富禮の後妻となった。

富禮の先妻はその出を知らぬが、何かで主人に熱湯の入った鉄瓶を投げつけたとかで離別されたと伝えられているが、その子の隼がフランスに留学中に発狂して送還された事(17)を思うと、或はその人に精神異常があったのかも知れない。しかしその隼にも妻があつて、幹、せつ、の二女があつた。此の二人の母は宮田氏の出であつた。

宮田銚女、同正高、内山處謙などの兄妹(18)と思はれるがその事は暫く措く。

悦子には子供がなかつた。富禮の歿後の悦子は、熱心な法華経の信者であつたが、(伊藤家の菩提寺は四谷の西光寺と言う浄土宗の寺であつ

たが。)後に大原幽学を祖とする、八石教会を知るに及んで、熱心なこれの外護者となつた。当時伊藤の屋敷は上根岸の一本橋を渡つて、石神井川を北に越えて二丁程の元金杉にあつた。其の屋敷の南は洋画家山下新太郎(19)の生家の経師屋山下と池を隔て、隣していたが、自家に程近い上根岸町百二十五番地に広大な宅地を買つて、其処へ八石教会東京出張所を建てたものだ。

悦子一人の喜捨とは思はれぬが彼女が教会の中心である石毛源五郎(20)規方を支持する気持は新興宗教の信者特有の熾烈なものであつたようである。規方又悦子を「奥さま」と呼んで特別扱いにしていた位だから(20)八石教会東京出張所については、別に記さなければならぬが、悦子の亡くなる頃十五六才であつた私が、彼女を西太后とよんだ記憶がある事から推しても、彼女は当時としては稀に見る権力と財力を許された老婦人であつたと考へられる。

しかしすこしも生産的な裏付けが無かつたので、後には孫幹の第二の養子源三郎(千葉県夏目の人宮内助右工門の二男(21)との財産をめぐる)の訴訟などで疲弊して、不遇の中に人生の幕を閉じたようであつた。(私はずねてほしいと思つた錢龜を五十錢で買に行つた。

悦子の肉親としては兄の子修立、黒部へ養子に行つた忠英(この人は通称をケンさんと云つた。字はわからない(22))その又弟で渡辺をついだ房、妹はつなどがあげられるが、此の外の甥と言へば弟為信の男の子三人と娘一人、並に宮田系の人々であらう。

為信の一人娘の錫は従兄修立の妻となつたが千葉の教会で若くして死んだ(23)此の一人っきりの私の叔母は私の母と同ひ年の元治元年生れであつたと云うが、二十を幾つも出ないでなくなつたものと想像される。男の兄弟の中には見られない才気煥発型であつたそうで、その死は長くその父為信を悲しましめたと聞いていた。

修立は後に後妻に伊勢の人でおことさんと云う人を迎へたが、悦子の暴君的叱責が因で失踪し、一生を一人で佐藤の家に寄食して終った。修立の性格に此の最初の妻錫の影が、濃く投影していたであらう事に察知するに難くない。

悦子の強烈な性格は、愛憎の念が非常に烈しかったらしく、その一つのあらはれとして嫉妬の激情が凄かったらしい。そしてその事は自分の目下の、言はゞ子や孫に当る者に迄及んだようである。

修立の家と云うのが貝塚にあったと云うが、其所の座敷を借りて源之助を生んだ後の私の母が静養している折、たま／＼庭先の石の蔭から鎌首をもたげた一疋の蛇を見た時、母は「これはおことさんだナ。」と即座に感じたそうである。自分に身近な妹であった錫を感じないで、行衛不明になったおことさんを思い出した処に西太后のはげしい所置がよく／＼若い人達の心にしみていたのだと、その話を聞いた時私は思った。

(一月十八日朝)

北角家については、今当時の武鑑に北角十郎兵工の名の見られる事以前前の事はわからないが、関東の震災以前に整理した北角家の墓の中に北角久琢先生之墓と為直先生の墓というのがあった。先生と特に記されるような人であったのであろう。

残念ながら自分には為直の烏帽子素襖姿の(修立を思い出させる面影の)肖像画を見た記憶がある事と、今その為直の自筆の和歌の短冊を一葉所蔵している事以外には何の記憶に残しているものがなく、僅かにあるのは修立以下のその弟妹の人達についての事共だけである。従って為直を頂点とする甥や姪の話だけという事になる。言ひかへれば父巳作の従兄弟の上だけと云うことになる。

修立弟妹は、これの他の親戚の人々と同じように、いづれも一度は八石教会へ入ったが後にはみんな脱会してしまった。この事は八石教会東京出張所の条でくわしく書く。

修立は通称を久(ひさ)と言った。⁽²⁴⁾これは北角の家で男の子が育たなかったので当時よく行はれた世間の習慣に従ったもので、女名前をつけたのだそう。渡辺房も実はその時の女名前が本名として通ってしまったものだという。黒部忠英がけんさんとよばれたのも同じ理由であったらしい。

修立は少年時代に二階の物干し台で風を揚げていて転落し、そのために右の肘を痛めて身体障凝者になって居た。気のどくな彼の食事する時の手の形は子供の時の私に、北斎漫画に出ている、蕎麦を食う男を連想させたものであった。二人の妻に別れた後、教会を脱会して、何であつたか憶えていないが、俸給生活者になり、晩年は従弟の巳作が自家に引取っていたが、五十二才位で亡くなった。

源三が彼の名蹟をついだのは、彼の希望に添って、其の死後に入籍したものと記憶する。年令順に語ると、次は黒部忠英であるが、黒部家は千葉県の忠英の妻からの生家の名字であろうと考へられるがよくはわからない。

忠英が電信の通信手(?)になって勤務中、大酒が因で脳溢血になり、佐藤の家へ引取られ源之助の守などしていたが、其の頃は甚だしく記憶力を喪失していて、よく「叔母様何時ですナ。」と幾度も私の祖母に時刻を聞いて、みんなに笑はれていた。鼻の脇に大きな黒子があつて磊落な人柄は好感が持てた。

私は今テレビで俳優北村和夫を見ると此の忠英の面影を思ひ出す。一番似ているのは、声の調子である。

彼の妻からは留守を守って百姓をして居たが、その長女くにはしっかりとした女で頭もよかった。脱会の後生家で店をしているという話を大正の初めごろ聞いた。今居れば七十五六であらう。くめのことは十二三才の彼女を見た以外の記憶はない。

その次が宮田温^{たうぬ}に嫁したはつであるが、これは巳作の祖母かつが嫌っ

て、「もしもあの娘を家の孫嫁にするなら、私は化けて出るよ」と云ったという話のある位、佐藤の家の空気とは違った人柄であったらしい。佐藤でその一家と、殆んど葬式の時以外には交際しなかったのは、彼の家が何を苦しんでか其の娘達を芸者にしたという事が、佐藤式潔癖に抵触したものでなかったかとも思う。

今記憶に残っているその子等の名をあげると次のようになる。



まだ娘があつた様な気もするが、いづれも人伝に聞くのみで、遇つた事は殆んどなかった。菅之丞は、神田の桜井という齒科医の弟子になり、後に群馬県藤岡で開業しているとの話を聞いた。なほだと記憶する娘の一人は、静岡県用宗に居た長野県出身の医師藤山人春原藤兵工の妻になつた。

正之は印刷工ではなかったかと思う。

宮田温は後に記す伊庭から来た正之の妻つねの産んだ子で一代萬朝報(?)の英文欄の仕事をしていた。⁽²⁶⁾「英語を読む事は達者だが学問的でないので、夫れ以上には出ないのだ。」と人の云っているのを聞いたが、一寸性格が軽燥で、酒などのむと品が悪くて、佐藤の家では歓迎しなかつた。

渡辺をついだ房⁽²⁷⁾は、一生南千住駅の職員をしていた。神経質な堅人であつたが、渡辺氏の先代章⁽²⁸⁾は好人物の養子で、もつぱら「出島のカルメラ」と仇名された白アバタの細君ていの独裁的家庭にあつて、娘のおいえさんという人が子がなくて死んだ後、千葉県岡井田から来た総兵工の娘のふきという細君なども姑の存命中は殆んど女中扱いで、房が「俺は今迄我まんして来たんだから好いがお前はいつ一人前の女房らしく扱

はれるかわからないから里へ帰って新らしく身の振り方を極めた方がよくはないか。」と言ひ、その好意に感激していくら苦勞しても辛棒しぬく決心をしたのだ。と後に人に話したと言ひはなしが自分の耳に迄届いている。

房は従兄弟の中では一番近代的な頭の持ち主で、覇氣こそ無かつたが佐藤の家の家運の傾いた時にもその将来について一番発言して呉れる親戚であつた。

北角源三が佐藤家歿落の後渡辺に引取られたのも、その好意のあらはれという事が出来様。勿論夫れは為信のよく親戚の人々の面倒を見て、みんなから慕はれてゐた、その反射のあらはれとも言ふことが出来ようけれ共。

渡辺に寄寓した源三はその頃から人眼をさけつ、写真器をいぢりはじめていた。その事は北角源三自身に書いて貰いたい。と思う家がつぶれかけても長男の源作は絵をかく事をやめなくて、生産的な仕事に就かうとはしないし、時々夜など来て世話をやいた房の苦勞も大へんであつたと思ふが、その頃にはそんな察しは出来なかつた。

房にはふきとの間に秋野という娘と、謙という男の子があつた。謙は後に小学校の教師になつたと聞いている。後に記す源次郎叔父の長男賢一が北千住駅につとめた事も、此の生字引的な渡辺房の口利きによるものと思はれた。

此の辺ではなしを我々の母の実家、井上の上に転じる事にするが、井上家は八石教会の關係以外にもっと大昔から千葉県に因縁が深い。千葉県と云つても当時は下総の国と云う方が正しいがその下総の香取郡香取村に香取七郎兵衛という名主があつた。その二男に生れたのが井上家の祖先元七郎胤隆⁽²⁹⁾で、以来井上は代々元七郎を名乗りつゞけて来た。

胤隆は百一歳という稀に見る長命の人であつたが、此の人の立志伝的な生涯は幼年時代によく話を聞かされたので、童謡の様に自分の幼な心

にしみ込んでいた。

彼は農家の弟息子に生れたので、「此の俣では何程成功しても高が知れている。」と考へて、少年の日に家を出て然るべき主人を求めようと思ひ立ち、当時登城の侍の大勢通行する、江戸の護持院ヶ原の道路の真ん中に旅支度のまゝね転んで、人の通るのを待つていたそうである。

果して通行の武士にとがめられたが、夫れを繰りかへす事何回目かに事情を詳しく聞いてくれる人に出逢い、「何とかして一人前の武士になりたい。」という願いが聞き届けられて、「兎も角も使つてやろう。」と云う事になり、夫れから次第に認められて井上氏を名乗るに到つたと云うのである。

此の人の経歴の中で、最も興味深く覚えたのは、当時浅草田圃のまん中にあつた大きな二階家を只に等しい安い値で買いつけたという物語である。

其の頃その付近一帯は、長雨が續くと屢々川が氾濫して、一面水びたしになつたものであつた。廉い二階家を買つた胤隆は、一人で二階に寝て居た所、はげしい風雨の後に夜空にひゞく早鐘に表を見たが火は見えない。

てつきり又例の水出だナと夜明けを待つ覚悟で床の中に大きく眼を見開いていると、ごとりくと何か次の間で音がする。

怪しんで手燭をともして境の襖を開けるとあはて、隠れようとする、小犬程の動物の姿が目に入った。

気丈の胤隆がこちら追ひ廻した末捕えたのは一疋の狸であつた。

そこで胤隆には、はたと思ひ当る事があつた。と云うのは此の家が篋棒^{ボウ}に廉かつた事だ。後には化物屋敷と仇名されているという人の話も聞いたが、素より化物など居りようもないと極る込んで居たのだが、或は此の狸が邸内に巣くつていて、水出の時などには困つて、家の中へ入つ

て来たのを、先住者が恐れて化物扱いをしたのかも知れなかつた。と気がついた胤隆は、次の日その狸に麦飯を肚一杯食べさせた後、「お前の御蔭で俺も廉い家屋敷を手に入れる事が出来たのだから、命は取らずにおいてやるが、もえ二度と人のびっくりするような真似はするな。」と云つて放してやつた。狸は夫れつきり出て来なかつたというのが此の物語の終末である。

その後此の胤隆は、墨田川を渡つた川東へ転住したと見えて、城中で勤番の侍達が食べ残した飯を、「勿体ない。」と云つて袋に入れては持ち帰り、墨田川を渡る時に、永代橋の上から「魚に供養するのだ。」と云つて、いつも夫れを川の中へ投じたという話も伝はっている。

昭和の戦災の為に焼けてしまつたが井上家には、行儀あられの袴をつけた、胤隆の百歳の時の画像があつた。丸顔の眼の大きな逞ましい風采の人であつたが、黒子^{ホクロ}が沢山あつたと見えて、夫れが克明に描かれていた。

定紋は井桁と矢車とが用いられていた。

菩提寺は今も下谷の鶯谷の坂を下つて、浅草へ向う道の左角から二三軒目の清正公を祀つてある要伝寺³⁰という法華寺である。

胤隆から何代目に当るか暫くして井上家では二代養子が続いた。その前の方が後に函館奉行所勤務になつた井上信濃守³¹であつて、此の人の写真³²は朝日新聞が曾て大正十四年写真発明百年展を開いた時に陳列されて、その時のカタログアサヒグラフ増刊にのつている。妻は家女できんと呼んだ。

此のきんに出来たのが私達の祖母の順である。後に弟甲子郎が生れたが、夫れは後の事なので順は養子をした。これが矢はり元七郎を名のつた。徳川の軍官学校の様な所へ入つたと見えて古風な軍服を着た写真があつた。温厚な秀才型の人であつたらしく思はれるが二子があつて二十八才で亡くなつた。此の時順は二十四才で、長女民は四才、弟豊は

二才であった。此の民が私達の母なのである。

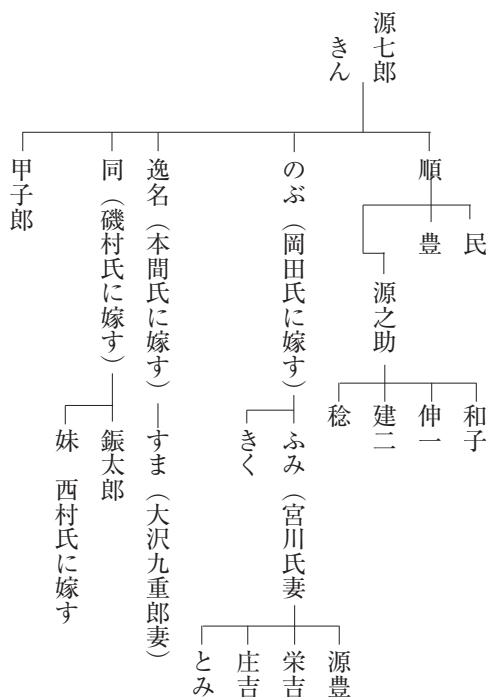
函館勤務をした元七郎（源七郎とも書いた）は木村氏の出で、実家を継いだ兄の外にも男兄弟があつて、一人は細谷氏へゆき、一人は河津氏へ行った。

細谷の甥は後に高田商会へ入った安太郎⁽³³⁾であるが、維新の際五稜郭の戦争で戦死したと噂された程に戦つて、体には無数の刀痕があつたという。

河津を継いだ祐賢⁽³⁴⁾は歌などよんだと見えて此の人が如水（元七郎の号）の年忌の時によんだ歌の短冊が現存している。此の人も男子がなく、その後嗣には後に法学博士になった河津⁽³⁵⁾が養子に來た。此の河津家は例の曾我兄弟の仇討で有名な河津の後で毎年先祖祭をしているという話を聞いていたが、祐賢以後はだん／＼行き来も遠くなり、当主の暹^{セン}と年令も違う自分達がシヤム（今のタイのこと）とよんで僅かに縁故者である事を感じていた程度であつた。これらは質の良い方の親戚であつたが、そうばかりもいなくて誰か兄弟の一人が養子に行った先の大原銀次郎など、いうのは身上を呑みつぶしてしまい、方々に迷惑をかけたらしく、零落しても言葉だけは鄭重であつたが順の所へ無心に來た事があつた。これは元金杉の家での事であつたが居留守を使うつもりで中スキになつてゐる杉戸を締めようとしたら、その戸が倒れてしまつて、その中に針仕事をしてゐた順の上へ傾きかゝり、結局氣を利かせたつもり自分の応急所置は何にもならなかつた失敗的一幕などもあつた。

甲子郎は順の末弟であるが、名前から推定して元治元年の甲子年の生れではなかつたかと思はれる。甚しい反つ齒であつたと聞いていたが率直な性質であつたらしいことが順や民の思ひ出話によつてうかゞはれた。大学予備門と云う様な所へ通学中に亡くなつたという事で明治十七年の九月二十九日がその命日である。男子のすくない井上ではその外に甲子郎より二才下の民の弟豊が居たがこれも亦二十年の八月二十五日に

病歿したので順の外孫源之助を後つぎにする事になる迄の約二十年間というもの井上家の戸籍は順一人きりであつた。しかし順には妹が何人もあつた。
そしてそれらの妹の嫁いだ先が後に又縁故を生じているから次にその人々を挙げる事にしよう。



順は若くして寡婦となつたが、後に記すような徳川の家臣の何人か、八石教会によつて新しい心の棲み家を得ようとした動きに同調して、二人の子を連れて入会した。

そしてその娘民は主宰石毛源五郎の養女となつた。しかし順のしつかりした性格は、事実上教会の隠然たる勢力となつてゐた悦子には煙たい存在となつた。数年の後色々考えた上順は教会員としての自分の将来に見切りをつけたが、二人の子供を連れてゐたのではどうにもし様がなないので、民を教会に残して豊だけをつれて脱会した。そしてつてを求めて後に海軍大臣になつた西郷従道の家に旧幕臣という素性をかくして裁縫師として抱へられた（針妙と云つた。）名前もたけと云う変名を用いたと云う。

どの位居たのか聞き洩したが従道夫人が「お前は徳川の者であらう。」と云ったと云う話と、その夫人が異常な潔癖家で、一度便所へゆくとそのあと手桶に一杯位の湯を使ったという、話を聞いたことがあった。体格は大きかったし筆蹟も見事であったし物腰も落ちついていた順が、どうもたゞの針妙とは見へなかつたであらう事は想像するに難くなかつた。

その後西郷家を出た順は当時花柳界などを賑はせた平岡大盡の門内に暫らく住んだことがあった。その時母民につれられて行った私は、其処に二人のお婆さんが居るのを不思議な気持ちでながめた事を覚えている。

その二人と云うのは順とその母きんであったが、今思うと子供の眼に映つたのは此の二人がお婆さんと云つても、割合に若く見えた事だ。親のお婆あさんの方が小柄で、娘のお婆あさんの方が大柄であると思つたのもその時の印象である。

後に甥の磯村銀太郎が、時々真面目とも冗談ともつかぬ口調で、「此の伯母さんは、今頃は裏店でマッチ箱でも貼り乍ら愚痴でも云つて居そうな道をおさるいて来たのに、何時でも紫の座布団の上に座つて、みんなの上座におさまっているが、よっぽど運のいい人だ。」と云うのを聞いたことがあるが、順にはどんなに貧乏しても貧しく見えない貫祿と気品があつた。鯛や秋刀魚は一括して下魚と呼ぶような所があつた。後に姪のすまの子供達の面倒を見てやるために、大沢家に寄寓した事もあつたが、養子にした孫の源之助が成人すると名古屋を振り出しに一しよに暮し、曾孫達も見た上で八十六才の春、娘の民の看護をうけて、当時田端に居た佐藤の家で安らかにその曲折の多かつた生涯を了へた。

順の妹のぶは、姉にくらべると音和しい一方の性質で岡田房州とよばれて一寸意地の悪い所が芝居の師直もどきではなかつたかとさえ想像される、岡田安房守の子の顕次郎³⁸に嫁ぎ、意地の悪い舅に仕へて苦労した話が伝はっているが此の人には三人の子があつた。

長男某は矢はり一時八石教会に居たらしいが出来はよくなかつたらしい。

その妹ふみは宮川氏へ嫁した。自分達の知っているのは無論宮川としてのふみであつたが此の家にはふみの祖母にあたる切り下げ髪の芝居の後室様型の老婦人が居た。みんなは此の老婦人をおさだ様と呼んだ。おさだ様はつまり岡田安房守の未亡人なのである。

従つて、此の人の教育方針が宮川家の子供に作用したから私と一つ違位の豊造即ち後の源豊和尚の如きは子供の時から親戚へ時候の挨拶などにやられても、聞く者の方が照れくさい位紋切型の口上を仕込まれてた。

この様な眷属を持った宮川は豊吉と云つて小僧の時から材木屋であつたが神代杉を掘つて大もうけをし様というのが一代の念願であつたが、目ざした様な好い木が掘り当てられなくても次から次へと計画を立て、一代その仕事をやっている様に見えた。そしてついに芽の出た事はなくてしまった。手許不如意になつた佐藤がせめて元金だけでも返して貰いたいと請求してもついに返済して貰へる事は来ず、催促に行つても得る所は何もなかつた様である。此の家には豊吉だかふみだか或はその両方だかわからぬが、何をするにつけてもその指示を受ける木鳥さんと云う易者がついていた。此の女の易者の云ふ事に「豊吉さんと云う人は凡そ幸運に値する一かけらも持つて生れていない人だが、僅かにふみに授かつた分があるので夫れで持つている。」と云つたという話を聞いた。少年期を幾つも出ていない私は、その様な断定を敢て下すその易者に対して、すくなからぬ憤りを覚えていた。

先にのべた豊造は病気の平癒を願つた事の叶つたのを機会に頭を丸めて浄土宗の僧侶になつたけれ共、俗事を超越するだけの道心もなくて、つまらぬ事でノイローゼになり自ら死期を早めた。のぶのはなが長くなつたがのぶの又妹は二人あつて、一人は本間氏へ、一人は磯村氏へ嫁

した。本間へ嫁した妹は子供が一人あって亡くなったがその子が後に四谷筆筒町で繁昌した歯科医大沢九重郎³⁹の妻のすまである。此の人は早く母に別れた為めもあらうが、伯母の順をたよりにして自分もよく伯母の為めにもよいように、順が源之助の独立して一家を持つようになる迄、順に一しょに住んでもらった。しかし此の人も沢山の子供を生んで、割合に早く亡くなった。

磯村へ嫁した妹には男女二人の子供が出来た。その兄の方が銀太郎で妹が後に西村氏へ嫁いだ。後に井上源之助の妻になったしげは此の西村氏の娘である。

従ってこれは、よく絶えぐゝになった家系をつなぎ止めた、順の心遣いの結果であつたらうが、茲に於て井上は遠くなった親戚とも再びつながりを保ち、子供に恵まれなかつた昔の姿から完全に脱したわけである。

余事であるが少年時代の私は、よく親戚の人達から「豊^{ゆたか}さんによく似ている。」と言はれた。夫れは実際でもあつたらうけれ共、其の事は蒲柳の質であつたその叔父のように、自分も亦二十才位で死ぬのではないかと云う気持を多分に私に持たせた。

叔父の豊は母親よりも父親に似て居たらしい。その父親の写真はどれも細面のやさ形であつた。美術的なセンスのある人間の一人も居らない我が家に、自分達兄弟のような者が生れたのは、此の外祖父の遺伝ではなかつたかと思はれる。曾て私はこの祖父の彫つたという、楕円形の茶盆を見た。夫れには何か花が彫刻してあつたが、此の様に祖父は絵心もあつた人と考へられる。

沼津へ行つていて病気になる、そこで亡くなったので、墓は沼津市城内町の本光寺⁴⁰という寺にある。此の寺へ父の巳作に連れられて参詣に行つたのは、自分の小学生の時自分の汽車に乗つたのは多分此の時が最初であつた様に思う。

(一月二十一日)

夫れは八月の暑中休暇中の事であつて、おそらく外祖父元七郎の年忌に当る時であつたと思はれる。つまり順が自分の代りに婿の巳作に沼津ゆきを頼んだこと、思はれる。

何でも其の時は沼津に大火⁴¹のあつた後の事で、寺も類焼の厄に逢い鐘樓を残して大部分焼けてしまつた本光寺では、その時は仮建築のような建物であつた。その日住職は不在で梵妻がお茶を出して呉れ乍ら、火事物凄かつた事を話して、皆が此所は安全だと思つて境内へ荷物を持ち込んだ為めに寺は焼けてしまつたのです。と残念そうに話していた。

此の寺は夫れから更に十何年か後に今一度訪ねた記憶がある。多分夫れは関谷楚山先生が、横手から帰られた後一時東草深に居られた事があつて、そこへ伺つた事があるからその帰りであつたと考へられる。関谷先生の紹介で静岡新報の滝閑村氏にあつたのも此の時と思うが、それが先生の牧師の最終で、その次上京された時は牛込の南榎町へ住まれた時、すなはち今の産経、当時の中外商業の政治部記者として立たれた時であつた。だが今は此の話の方へ入り込んで困るから、此の話は又の機会にしよう。

どうも覚えて居るよう居て思ひ出せないのも困りものだが、生じつか記憶がむやみとよみがへつて来て雑草の生へるように色んなことが前後の脈絡もなく蜂起してくるのも始末が悪い。

こういうのが年寄の常だろうと片づけてしまへば夫れ迄だが。

却説、前にも鳥渡ふれかけたが、此の辺で私達の親戚の間に大きく影響を与へて居り、自分の如きはむしろ其の中に人間形成を行はれて、長短共に夫れを離れては考へられないと思はれる、八石教会⁴²(自分達の間では、これを内容の点から、性学と称していた。性学とは中庸に所謂「天命之を性と謂ふ」と言う語に端を發したものと思はれる。以下性学と呼ぶ。)に就いて書く事にする。

八石教会は、尾張の浪士で、大尊寺玄藩の子と推定される、大原才次

郎幽学が、下総に開いたもので、英国の産業組合よりも、尚百年早く出来た、一種の「新らしき村」と目されているものである。

これを体系づけて編述したものは何と云っても元東京市長北雷田尻稲次郎の著した、「幽学全書」⁽⁴²⁾であるが、年代的にはこれに先立ってその片鱗を紹介したものは、明治末に探検世界誌上に美土路春泥氏の書いた、「丁髷の炭団屋」⁽⁴³⁾であらう。記録として、又思想体系のまとめとしては、素より量に於ても前者の方が数段まさるものではあるが、事東京の教会出張所に就ての付記に関する限りは承服しにくいものがある。幽学全書の後記をかいた高木ながしは多分人づてに聞いた外には何も東京出張所の事を知らなかったであらう。

そのことは枝葉にわたるがその人やその未亡人を知っていた伊藤の養子源三郎自身がすでに自分の一度身を置いた性学の何たるかについては理解を持たなかったのだから、其処から複写された記述では夫れが見当を外れていても仕方がない。

結論と言へば幽学を紹介する為めの幽学全書の巻末に、真相を知らない人による後日譚などが無用だと云うことなのである。

かく言う私の言ひたいのは、今も亦明治維新に似た様な大きな時代の断層の見られる時、前の維新に直面した時の江戸の武士達は、どの様にしてその俄に失はれた安定感を取り戻さんとしたかと云う事の一部分として、これを佐藤家及びその親戚の上に見様としたのである。

其の様な意味で前記の美土路文書及び後に昭和二年三月の中央公論に下田将美氏の書いた記事⁽⁴⁴⁾の方に客観的正鵠さを認めるものである。自分は見えていないが幽学に関する研究は後に高倉輝氏のもの⁽⁴⁵⁾がある筈だし、陸軍出の飯田伝一氏の小著⁽⁴⁶⁾もあるし、色々な人の著書がある様だが、私の場合はその様な先覚者の紹介ではない。

三百年より所としていた幕府の倒れたあとの武士階級が、一私人として、其の心の生活のより所として中には藁をも掴む思ひで此の教会に入

り、夫れが又どの様に四散して行ったかを、自分達の同族のある時代の姿として回顧して見たいと思う事に外ならないのである。

信州には上田市教育委員に小山曲水氏があって、上田時代の幽学の事を調べて居たようなので、一度訪ねて色々聞き度く思っていたが、戦時中の事で夫れも果せないでいる内に小山氏も亡くなってしまった。

実の所、私自身も、秩序立って幽学の著などを調べた事はなく、たゞおぼろげに聞き伝へていたり、或は見覚えていたりしている東京教会の姿から、逆算的にあれこれと記憶の断片にページを打って、順序を立て、いるに過ぎないのだが、客観的な悲劇の人々を、たゞ明治誕生の大浪に流された藻屑と見るだけで片付けてしまう事の気のどくさと、明治がよき時代であるならば、其のよさとは何であったかを噛みしめて、其の由来する所の正義性とも言うべきものの残滓を反芻する気持も手伝って、此の一団の事共が書いて見たかったと云うわけである。

しかし文筆の人間でない自分には、ちと分に過ぎた大荷物であり、雪洞もちと年を取りすぎたようだ。
(二月二十二日)

閑話休題。所で性学に参加した諸家を拾い上げると、第一が伊藤悦子である。当時悦子はすでに未亡人であったと思はれるが、此の悦子の生家北角、北角から養子に行った佐藤、黒部、渡辺、隼の妻の里の宮田氏、その宮田氏へ嫁しているつねの実家伊庭家⁽⁴⁸⁾から出た妹達田村山口の二軒、狂言に関係のあったらしい宮内与惣治⁽⁴⁹⁾の一族、その宮内へ後に娘の嫁した入江一家、辻永や和田三造、橋本勲助などが上野の美校の生徒であった頃下宿していた内山氏（これは宮田の親戚である。）などが先づ挙げられる。

其の頃の此の人々の住所を列記すると、佐藤は下谷竹町に、井上は牛込の築土に、宮田は日暮里の山の上に、田村は下谷に、伊藤は根岸に程近い日暮里の元金杉に、内山は前田邸や諏訪邸のあった上根岸の藁葺屋根の家に住んでいた。

そして新らしい木道具の建築は、上根岸の鶯横町に近い子規庵⁽³⁰⁾の近所にあった。これがかゝって居た板看板の文字の示すごとく「八石教会東京出張所」であった。

此所は下谷区上根岸町百二十五番地で、西側だけが隣の屋敷に境していたが、南北東の三方は、いずれも大小の差こそあれ道路であった。此の西隣の屋敷は、後に中村不折の書道の宝庫とよばれた土蔵のある邸宅⁽³¹⁾となるのだが、その頃は日本橋の老舗、本惣太田吉左工門の別荘で普段は大沢栄吉という留守番親子が住んで居った。

此処も以前は誰かの旧居であつたらしく、東西二軒の宅地には、共通の池があつて、水だけは一つゞきに成つていた。

此の屋敷を買取る時の名義人は為信であつたが、金は大部分悦子から出た様であつた。庭には何本も老松が聳え、南には茶の畑などもあつて広い境内であつたが、自分の生れる前の教会の全盛時代には、石毛規方の話を聞きに、毎日く多くの会員が集まつて、幽学以来の人生論を聞く事によつて、俄かに頭はザンギリになり、昨日迄の下々の人間が無遠慮に物を言うようになり、足軽上りの官員が馬車に乗つて横行する不愉快から、すべてを忘れようとするものの如くであつた。

生活の資は諸家の気前の好い寄進によつて何処からともなくフンダンに持ち込まれて、酒と絃歌のひゞきこそなかつたが、みんな冬がやつて来ても、外を吹く風は覚えぬかに暮して居たらしい。

月見の時に狂歌などを作って興じ合つたはなしも伝はっている。

月かげはわしが頭と佐藤様

宮田の君もすこしな仲間

と云うのがあつたが、その作者は聞いて居なかつた。(一月二十三日)今其の頃のはなしを聞いた思い出を、批判的に回顧して見ると、色々な点で「道徳的利那主義」とでも言うべき特色を持っていて、会員はもつ

ばら「肚」の修業を重んじて、儒教的な、或は国粹的なと云うか、反欧化主義とも言うべき消費中心の生活をして居たようである。

當時を回顧して後に内山處謙が「あの頃は米は米櫃から出る物、灯心は行灯の引出しから出るものと許り思つていました。」とよく云つて居た事が思いだされる。

清談を事として暮す人々の間では、ケチな事が一番嫌はれた。従つてもフンダンに使う事がよるこばれた。

何か夫れに前に日本の各地に見られた「ヤッチョロ」の流行に似たものが感じられる一種の熱っぽい現象とも言へようか。しかしこれは酷評すれば、一種の花見酒の経済であるから、時が来ればゆきつまるのは固目から見れば明らかかなものであつた。そして亦その様な流行につきものの幾つかの矛盾は此の場合にもあつて、夫れがゆき過ぎた結果は道徳的である事が固定化した姿勢の、禁慾的な色彩をも生じる結果を生んだ。

勿論これは前のフンダン時代が下火になつた後に出来たものであらうけれど共、自分の知つて居る頃には教会の何処かに掟の様なもの木札に書いて掲示してあつた。今思ひ出すと夫れにははじめに定として、酒煙草、博奕、食事不正之を禁ずと書いてあつたのを若い人が読みそこねて、不正の正の字の上の一面が小さかつたので見落して、食事止まずかと云つたという笑ひ話もある。

しかし前のフンダン時代禁慾時代と移つて二十年近く経つ間には追々と此の反動的陶酔から醒める人達が出来て来た。ことに夫れは若い人多かつた。古いものに大した記憶もなく又執着もない若者にとつては、先づ明日の自分を如何にすべきかという事が何よりも切実な問題となり、同時に禁慾的な日常があきたらなくなりはじめた。脱退者はだん／＼数を増しはじめた。

なほ此処でくわしく彼等を刺撃した点をあげると、粗食に甘んぜざるを得なくなつて、食事が貧しくなつた事、獣肉を甚しく忌み嫌つた事、

後には砂糖の使用を禁じた事、服装の上では昔のまゝに丁髷を結っていた事、衣服に極端な制限をして、全部木綿だつきにし、女子の頭の如きも老若一様におぼこという或時期の江戸市民にとっては葬式の時の髪形であった事等であった。つまり必要上徳川時代の生活様式以上に質素を主とした生活であったが感情の上では天皇の名による新政府をも軽蔑して居た。「どうも四つ足を食う人達にする事では——。」と云った具合に。

佐藤為信は此の様な流れのかたはらにあって、シンパにはなつたが入会はしなかつた⁽⁵²⁾。その時の言葉というのは、「私は意志が弱いから、神に誓つて約束するという様な気にはなれない。しかし自分として出来る限りの応援はする。」と云うのであつた。これは入会の際に誓紙を書き血判をして神に誓う事になつていたからである。なほこれは国家神道の機関である神道事務局から、このグループも亦神道の一派に属する様に勧告を受けて神棚をもうけ、皇太神宮を祀る様になり、主宰である規方には教導職という職位が与へられた以後の事であつたと思ふ⁽⁵³⁾。勿論これには俳諧の結社の宗匠にも権少講義など、いう肩書をくれて新勢力の身方に引入れる事に努めた時の政府の一方的な押つけであつた事と思ふけれども。

この様な事情の間に東海道の各地に教会の出張所の出来ていたのは、東京出張所設置以前の話に溯らなくては順序が立たないので、以下に(これは雪洞の—夫れも少年時代に断片的に聞き伝へたものの綜合にすぎないけれ共)開祖大原幽学の死から、東京へ出張所の出来る前の事共を記す事にしよう。

(一月二十四日)

大原幽学の事は、すでに世間に知れわたっている事だから、事新しく書く迄もないし、自分が又聞き囁きの話を書く事は、かへって話をやこしくする基だから控へるが、僅かに世間に伝はつて居りそーもない事で自分の知っている話というのは、明治の末のスポーツ記者であつた加藤進氏の父親が大原幽学自刃の、検屍の役人⁽⁵⁴⁾であつたという事を、加藤

氏自身が祖父為信に話したということである。祖父と加藤氏とは、我が家が元金杉の七百二十七番地に住んでいた時、幅三メートル程の小道を隔て、道の両側の屋敷に住み、隣同志同様の位置にあつたため、挨拶位は始終する間柄であつたので、何日かその話を聞いたものであつた。父君の歿後その進氏の妹のふでという娘が通信省ではじめて任命された、女判官の二人の中の一人だつた、という話もあるが、加藤氏も亦当時の斜陽族であつたようである。

所でその幽学の死後、当時下総の中和村長部八石にあつた教会は、高弟遠藤良左工門亮規(すけのり)が後をついで子弟の指導に當つていたが、後に東京に出張所を作つて、瓦解によつて心のより所を失つた、江戸の士族の残党の間に同志を獲得した石毛規方は此の亮規の門人であつた。

聞く所によると源五郎規方は、医師石毛玄仙という者の子であつたが、早く父を失つたために、若い時から稼ぎ第一主義の青年であつたが、たまゝ幽学の自刃を聞いて、その切腹した松の根方に集まる群集の一人となつた時、深く心を打たれるものがあり、夫れからは一切家事を抛棄してその母が「性学は茶碗には盛られぬ。我が家の田は素植だ。」と歎息した。と話した事があるが、素植えは何にも肥料を施さずに田植をする事で、源五郎が家の仕事を一切省みなくなつた事を歎いた声であつた。

遠藤亮規には、鈴木栄蔵⁽⁵⁵⁾、飯島八十八⁽⁵⁶⁾など、いう、源五郎と同格の門人が居て、幽学の死後はその遺風を支へるためにその直接の師亮規を助けて居たが、亮規自身は性格的に消極的な人であつたらしくて、後年実態の変つた(建物だけの)教会に住んだ、茨城県矢田部出身の、木鷄居士長谷川小四郎が或る時私に云つた事がある。「幕末勤王に名を籍りて、軍用金と称して金の調達に来る者、言はゞ詐偽兼強盜を行う者が来た時、遠藤先生は、福の神入口と貼り紙をしてにおいて、彼等の要求を叶へ

てやったというが、このやり方は納得出来ぬ、是が大原幽学先生であつたらば、恐らく一刀の下に斬り捨てたであらう。」と。

其の当否は暫く措いて、その亮規が病氣になり、自らも再起不能である事を自覚した時、門弟を連れて東海道を西へ向つた。そして泊りを重ねて近江の石部⁽⁵⁷⁾へ着いた時、そこで病革まり、門人達に圍まれてなくなつた。

此の旅は、何か門人をつれて流浪する孔子を思はせるものがあるが、その時の門人の態度に感心した土地の人が、親切に青木ヶ峯という土地を提供して呉れて、其処へ亮規を手厚く葬つたところから、新に石部にも教会の出張所が出来た。そしてその後源五郎規方は毎年その師亮規の墓参りをするために、東海道を徒歩で石部迄往復したものである。

私の母民にもこれに同行した思い出話があつた。夫れはその時赤ん坊であつた源之助が背負はれて行つたという事が、何よりもあと迄いろいろ／＼な思い出となり話の種を生む原因となつた旅の何日かのあけくれであつた。

次の泊りの宿はどこかという家とわかつていても、男達がどん／＼先へゆくので、いつでも徒歩の一人旅同様で「親切な老人宮内助右工門老がよく途中で待つて居て呉れた時には本当に悦しかつた。」と母はよく此の時の旅の苦勞を物語つた。

夫れが果して幽学の考へであつたか否かはにわかには断定し難いが、兎に角その様に規方のスパルタ式な、且懐古的な旅行は彼の生きてゆく姿勢そのものを示すが如くに、一代つゞけられた。

規方は定期的の下総へゆき、又東京へ帰り、石部へ行つた。そして箱根の旧道施行中には、無料の茶飲み所を作つた。(二月二十七日)

此の接待茶所とよばれた無料休憩所⁽⁵⁸⁾が、何年に出来たかは、そこに掛けてある茶釜に規方の筆蹟で「広く道友の爲め此の器を鑄て、長く施行平茶所の用に充つ。」と云う意味の文字が、規方の花押と共に浮彫され

て居り、自分も明治の末に訪れた時の写生を持つているし、井上も四五年前に行つて見たと云うから確かに此の茶釜には茶所創設の年月が刻まれている事と思う。所は昔の石を敷いた道を元箱根から三島へ向つて一里下つた所で当時のよび方で言へば伊豆の国田方郡錦田村字施行平と云うのがその地名で裏の山へのぼるとすぐ眼の前に愛鷹山の見える所であつた。

此の茶所は名の示す通り、道行く旅人の湯を匡するために奉仕的に設けた無料の茶のみ場所でもとより茶代は申受けないのであるが、頭の丁髷が示す如く頑固に茶代を拒んでいる。大正時代に、たしか閑院宮載仁親王であつたと思うが此所に休憩された時、あとでお付きの人がことわるのを無理に茶代として何がしかを置いて行かれたところ、そのあとを追つて東京へゆき、宮邸の前を迂路ついて居た為めに怪しまれて皇宮警手につかまつたが、漸く事の次第が判明して釈放されたという話が、時の新聞に掲載された。その時上京した人は、林嘉十郎⁽⁵⁹⁾が岡田清作⁽⁶⁰⁾かであつたと思はれる。(此の岡田清作は通称を新四郎とよばれた人で、炭団屋をはじめた山口さくの実兄であつた。)

⁽⁶¹⁾これに先立つて上根岸の東京出張所は風呂場からの失火で大半焼失した。

先に述べた如く、教会の内容がこの様に厳格なものであつたから、男女の壁は儒教的に厚くて、講堂以外の会員の宿舎は、一様に弁当所と呼ばれて居て、上根岸が男子の弁当所、元金杉が女子の弁当所であつたが、たまたま規方以下男子の大部分が下総へ行つた留守の事で、見付けた人が近所隣人でも知らせる事が、わざ／＼女弁当所迄二丁程の道を走つてゆき、戸を敲いて告げたので、人々の馳せ付けた時にはすでに一面の火であつたという。また鳶職が町火消しとして、威勢の好い所を見せていた時代とは云へ、一つの性学らしさがそこに感じられた。

どうもこの火災は、雪洞の生れる前の様である。火災としては教会に

はまだ此のあとに美土路春泥氏の紹介された、丁髷炭団屋の山口さくの家が怪し火で焼ける事があるのだが、これらの事は何か弱り目に祟り目と云う感じで、性学の下り坂そのものを思はしめるものがある。

規方の強い性格は、一方に於ては新しい帰依者を集め得たが、半面古い道友からは指導者づらをするという反感を持たれたようだ

石部でなくなった遠藤亮規は石毛鈴木飯島等の門弟に対して夫れくの長所短所を見ぬいて居たから、誰が次期の主宰になっても事に面倒である事を感じたのであろう。俺の死んだ後は三人で合議の上教会を運営してゆく様に云ひ残したと云うが、どうい順序で規方が中心になったかは聞いていないけれど、他の二人は新しい会員の様には石毛に心服して居なかつたのであろう。

飯島八十八が或る時規方のはなしを聞いていて、「は、あ『これは権現様気取りだな』と思いました。」と佐藤の家の者に話したと云う事が伝はっている。云う迄もなく権現様とは徳川家康を指したものであるが、その事はやがて月日の経つ内に、親の代には感動のあまり無条件で教会へ差出した土地や財産に対して未練が生じ、法人的な管理など知らない人々の間には悪意がなくても結果として生れる不明朗さが、熱の失せた信者の不快や反感となつて、多くの問題が起る様になった。

これも実は雪洞の生れる前の事ではなしに母から聞いたものであるが、もつとも念の入った反主流派騒動に火野葦平の糞尿譚⁽⁶²⁾ながらの糞さわぎがあった。

これは下総の本部での出来事なのだが、重要な祭日にあたって未明に会員が本部の石段を上ってゆく所をねらつて両側から肥柄杓で下肥を打っかけられたものだそうである。

刑事問題にはしなかつたというが、何しろまるつきり無防備の所を襲はれたのだから、暗の中の事ではあり、一同丁髷頭から着物なら糞まみれになつてはなしにならなかつたと云う事であつた。これは規方が被

害者であるが、一方又逆と考へられる事件もあつたのである。その一つがこれも下総での事で此の方は刑事問題に迄発展した様に聞いたが、茶の木事件というのであつた。

性学は茶碗に盛られないと云う言葉の通り信仰だけでは生活出来ないと感じた道友が別に生計の途を立てるべく茶の栽培をはじめた所、強硬派は「本来の精神主義に還れ。」と説得につとめたが聞き入れない。そこで彼等は公然とその茶畑へ押しかけて、茶の木を抜き捨てた所から、不法侵入その他の罪に問はれたという事件であつた。⁽⁶³⁾

この様な形勢に成つてくると、これは言はゞかたまり法華の信心の様なもの、耕地整理や合理的農家の設計迄考へた幽学の理想にははるかに遠い、むしろ夫れには無関係なものとなるのだが、一種の末期的現象として、此の反動的強硬説得は、多くの離脱者の上に加へられたらかつた。圧迫は反抗を促し、反抗は又次の圧迫を誘発して、性学本来の理想とは大分違つたものとなつた。

我々兄弟の内三人迄は規方によって命名されたが、末弟の登は一人だけ違ふ。この事がそのまゝ、遂に自分の父巳作も亦断髪組になつた事のははれであつた。―後の事だが―。

尚末弟豊の命名者は、当時印度から帰朝して、はじめて両忘庵を開いた、輟翁釈宗活師⁽⁶⁴⁾である。宗活師がはじめて開いた両忘庵は、伊藤悦子の家の奥座敷の四間で、当時十二三才であつた私にそこで宗活師の提唱して居られる美しい姿を見た。まだ完成には至らないが、流る、如き様で描かれて彩色のはじまつている観世音菩薩の絹本画をも見た。

その後元金杉の坎ノ堀に近い、田圃の中の一軒家に移つた時熱心に来る参禅者の中に山崎井上と云う二人があつた。

山崎氏は山崎平という人の子で先生、井上氏は山崎氏よりも年長で四十代と見受けられたが両忘庵の寺男格で、よく腰衣をつけたまゝ、で肥桶を担いでいた。宗活師は夏目漱石の小説「門」の中に出て来る鎌倉

の宜道さんで医学博士で明治天皇の侍医であった、入江達吉博士の実兄であった。宗活師はよく日本橋浜町にあった楠田という産婦人科病院へ法話にゆかれたが、その関係で自分の父巳作が僅かの間病院の雑用を手伝いに行っていた事があった。楠田夫人が我が家を訪問された事もあった。登の命名を宗活師に依頼したのもそんな関係があったからではなかったかと思う。

後に宗活師の身のまわりの世話をした徳永直子という婦人は、此の楠田病院の看護婦長であったが、父親と二人で御院殿あたりに住んでいた。その頃の自分の失敗の一つに無断で父の休日である事を忘れて病院へ遊びに行き帰りがおそくなって家中に心配をかけた事があったが、その時自分を送って来てくれたのは此の徳永さんでその時徳永さんは「おそくなりましたのは、私が一しよに帰るからと云って御待たせした為めなのですから、どうぞお叱りにならないで下さい。」と家の者にとりなしてくれて夕暗の庭先から帰って行った。私はその言葉をうれしく聞いていた。誰も叱りはしなかったけれど、墨田川へ釣に行つて従兄の賢一と別れそのまゝ黙つて日のくれる迄帰らなかつたのだから家では随分心配したはげであつた。その時は北角修立が同居していた時代で、吾妻橋の袂で賢一に釣竿を渡して別れたという事はわかつたけれど夫れは後の足取りがわからぬというので家の者は心配しはじめ、修立も悲観論で易者に迄見てもらいに行つたという事であつた。此の様な些末事を書き出すと又きりがなくなるから話は本筋に戻すことにする。

(一月二十七日)

先程性学の人々の集いが次第に結束を乱しはじめた事にふれたが、これを佐藤一族の上で見ると、叔母の錫は下総でなくなつて、性学の人としての短かい一生を終つたが、次の源次郎叔父は早くに脱退していた。叔父の家内は今の千葉県旭市の商人広六こと飯島六兵衛の長女で、その第六太郎なども曾ては規方の門人になつていた時があつた。金杉の伊藤

の外に伊藤(正しくは伊東)という家があり、その家が後つぎがないと云うので源次郎叔父が相続人にされたのだが、先方が性学を好まなかつた為めに一方的に離籍された形となり言はゞ両貫いの形の叔父夫妻は佐藤へ復籍せず、新しい伊藤を創立した形になつたのだという。たゞその養家伊東氏の菩提寺が千駄木から白山へ出る大観音のすこし先の左側にあつて、毎年正月二日に祖母が大円寺へゆく時にはいつも極つて此の寺へも寄つて、墓参りはしなかつたが付届けをしてゆくのが常であつた。

「木像」という仇名を付けられていたといふ此の祖母は、眼立たない存在であつたし普通の意味では決して仕合せな人ではなかつたけれど、心構えはよく出来て居た人で、どんな境遇に置かれても愚痴一つ言はず、じつと其の境涯に耐えて、その時には夫れが自然である事を噛みしめてゆくと云つた型の人であつた。黙つてやつてはいたけれど、親戚中の寺の事を一人でやつていた様な人であつた。言葉の上では特別に教へられなかつたが、自分がさん／＼まわり道をした後、夫れでも何か仏教的な考へに落ちつき得たのは偏へにこの木像の祖母の御蔭であつたと思ふ。

祖母についての思い出には、明るい楽しいものはあまり無いが、結果としてはその忍従の一生が自分に一代ものに堪える事を訓へている様に思はれた。

源次郎叔父は教会を出た後、静岡へゆき、やがて静岡監獄の看守になつた。現職時代に一度正服装で金杉の家へ来た事があつたが、その時はみんなが不在で祖母一人のところであつた。その何か話して「僕本当に困るんだ。」と云つた言葉を覚えていた。此の頃我が家には「ボク」と云う一人称を使う人間は一人も居なかつたので、子供の私には此の「ボク」が非常に珍らしい言葉に聞えたものであつた。

次の叔父平三は、伊藤へ養子にやられて、幹との間に(後に複雑な一

生を送る宿命の子)はやが生れたが、ついにその家を出てしまい、その頃麴町にあった武蔵屋という製パン屋の弟子になり、後に武蔵屋の支店として店を持った。此の叔父は兄弟中でも第一と云う位に一克な人であったけれど、少年時代には快活であつたらしく、八石の井戸と云つてその深いのが有名であつた、堀ぬき井戸に釣瓶が落ちて、誰も取りにゆく者が無かつた時、麻繩を伝はつて下りて行つて取つて来たために、規方からその褒美として、大小一腰を与へられたという、講談じみた実話があつたり、使に出る度に座敷箒を編んでいる店頭に立ち止つては熱心に編み方を見ている内に、その主人と顔見知りになつて、遂には自分で編む事を覚え、職業にこそはしなかつたけれど、自分で箒草を作つて、本當に箒を拵へ上げたと言つても残つてゐる。

後年三十過ぎてから何を感じてか琴古流の尺八を習う事を志し、その頃金杉の家の隣の吉岡仁助という株屋さんについて、これ又熱心に稽古を続けたりした。息子にせがまれて仕方なく祖母が相手をして何十年目かで三味線を弾いた事もあつたが、口三味線で「テンテツトン」と云う所を、尺八の方では「レーレツロー」と発音する事を知つたのも、此の頃の事であつた。

叔父の住んで居た家は麴町の下六番町六番地で、後に臀肉事件で評判になつた、気の毒な漢詩人野口寧齊兄妹はすぐ叔父の家の裏手に住んで居て、矢はり同番地であつた。

同じ町内には、自分が後年仙崖の絵などをその遺愛品の中にながめた、有島武郎の家もあつた。

叔母のしげは井口氏の出で、矢張り幕臣の家であつたが、よく氣の付く人で自分が祖母につれられてゆく時など細かく面倒を見てくれた。長男鉢一があつたが、十八才位で亡くなつた。夫れは祖母の綴がなくなつて間もなくであつたが、上京して鉢一の病床を見舞つた私は「お祖母さんには？」と聞かれた彼に、その動揺を想像して「おばあさんは亡くなつ

たよ。」と告げる事が出来なかつた事を記憶している。従つてその時が自分と鉢一との最後の対面であつて、彼は夫れから幾日も立たずに祖母の後を追つたのであつた。

一粒種の息子を失つた叔父夫婦は、生活の轉換の爲めもあつたであらう。店をやめて人に貸し、叔父は中央气象台の事務員となり、叔母は茨城県助川の旅館の有給マダムになつて働いた。そして数年の後に建てたのが笹塚の家なのである。下六番町の家は為信の買ったものであつたが、後に財産分与の形で叔父の名義になり、笹塚の家を建てる時に売却した様であつた。

私が下谷竹町に生れる迄の佐藤の家は、二十年以上その二十四番地に居たその爲めであらう。私達が日暮里へ移つても、教会の人達は我が家を「下谷」と呼んでいた。月日は記憶してゐないけれど、その下谷から三才の時に私は元金杉へ引越したのである。

四五百坪の屋敷で、平家建のその家は、大工の棟梁であつた人が、自分の住む爲めに建てた家であつたから、しっかりと建築であつた。北側には榛の木を風よけに並べて植え西の生け垣の中には庭を作り、東には野菜畑が広くとつてあつた。そして南には後に祖父の好みで芍薬の花畑が作られた。

此の家の前の持ち主が藤井と云つて、その一人息子が自分と同じく日本画を後にかく様になつた。年は一年以上であり、絵の稽古をはじめたのも一月位自分より早かつたと記憶するが、此の藤井正次を知る事がなかつたら、いや我が家が彼の家を買ひ受けて転居するといふ様な事がなかつたら、自分の一生は今日と大分違つていたであらう。或は自分が絵をかいて一生を送る事にはならなかつたかも知れない。

父母は大部分教会所へ行つて居たので此の家に始終居るものは祖父と祖母と孫の自分であつた。

祖父は碁を打つたり浅草橋から船頭を備つては釣に出かけたりしてい

た。

富むと云う言葉は当たらないがあまり苦勞しなくても其の日が過せる程度の暮しであったように思はれた。

米は御徒士町の奥州屋三浦藤三郎という朴訥な男が、葉書一本でいつでも一俵宛荷車で運んで来た。薪は厩橋向うの大川屋という店から届けられていた。もっとも奥州屋は祖父から資本を借りていたらしいが後にはこちらが借り方になったらしい。その頃はまだ父も母も大部分教会で暮していた家には居らぬ時が多かった。何にも生計の為めの仕事をする人間の居ないことをすこしも不思議に思はぬなど、今思へば珍らしい家庭であったのである。

白縫物語とか、童唄妙々車とか云う草双紙や、夢想兵衛胡蝶物語とか石言遺響とか云う馬琴のよみ本が幼い自分の眼にふれる書物があつたが、家の空気と性学の影響とが相まって、ずっと後年になって自分の知つた黄表紙ものとか草双紙でも軟派に属するものはすこしも置いてはなかつた。

五才になると実語教や童子教と云う大きな文字で印刷された単純な漢文の教科書を素読する事を教へられた。そのために私は小倉の袴を穿かされてツバクロとよぶ風呂敷を隅から三方中心へ縫いよせて一方のあいた所から物を入れて一角を包む女の子が長唄などの稽古本を入れる様なものに本を入れて、三四丁ある道を八石教会へ通つた。

教へてくれた人は鈴木孝三郎⁽⁶⁶⁾と云う壮年の人で何か清潔な感じの矢はり丁髷頭の人物であつた。此の人は矢はり千葉県出身であつたが此の人の父親は利右エ門さんという半白の老人であつた。此の人に就て一つの話がある。利右エ門さんは大部分教会に居るので滅多に家へ帰る事がない。そこで家の子供は世間の人が利右エ門の旦那とよぶからその名は知っていたけれ共、夫れが自分の父という感じがピンと来ないらしいのだ。利右エ門さんの細君が「私の家の子供は世間の人が利右エ門の旦那

とよぶのを知つていて、ある日主人が家に帰つて、何か忙しく一人で食事をして出て行きましたら、帰つて来た私に不思議そうな面持で「おっかあ、今日は利右エ門の旦那俺の家へ来て飯を食つて行つたぞ、おっかあ。」と話しました。」とはなしたという自慢ばなしは、当時皆が聞いていた。

その様に教会の中では個人の家庭はあまり省みられず、むしろ反対にその子供達は他人の家へ交換の形で預かれて成人するのが常になつていた。⁽⁶⁷⁾

我が家でも或点ではこれを分担していた。

其の様に他人の家へ子供を預けることを、其の仲間の間では、「仕込みに出す。」と呼んでいた。思ふに「性学者に仕込んで貰うために家庭から修業の場へ出す。」の意味であつたであらう。

其の様な意味で佐藤の家にも、恰度今アメリカの学生が交換留学をして日本人の家庭に家族の一員として扱はれて暮すのに似たものと考へられる。

夫れらの人の一人に、後年自分に関係の深くなつた、長野の西沢はつちの母親のおとしさんがある。おとしさんは何年か佐藤の家で暮したと見えて、祖父為信夫妻にも私の両親にも、本当に身内の夫れに近い親近感を持つていた。彼女は新見稲彦という人の子であつた。母親の事は知れていないが、悦子を中心とする伊藤にも居たので、年令的には伊藤幹の妹分の形だつた。事実、伊藤幹とは佐藤以上に親しかつた。その伯父に当る人、つまり稲彦氏の兄に新見正寿⁽⁶⁸⁾があつた。この人も一時性字に寄食した一人であつたが、此の人は上手ではないが絵を描いた。伊藤の家には横物の桃太郎の絵のあつた事と、佐藤の刀筆筒の中に刀と一しよに墨絵の鯉の紙幟が、虫に食はれて入つていた事を記憶している。

細面の小柄の人で、唇の厚い髪の毛の薄い人であつた。絵の稽古をはじめた頃師匠の大森先生から付けてもらった名前の敬尚という二字を此

の人に白字で印に彫って貰ったのが今もある。此の新見正寿は、幕末に渡米した使節の随員新見氏(69)の一族であった。熱心な道友であったが後には規方に背いて、曾て寄付した狩野探幽の六曲屏風を返せと云って、自分で取り返して行つたと云う話もある。

此の絵は歌という大文字を材木の様に人足が担いで組立てる所を描いたものであったが、詩歌の一双の内の半分で、他の半双のある所も解っているという話であった。

此の屏風はその後千葉の金持の所蔵に帰したと云う事を聞いた。

新見氏には女の子達があつたがみんな早く死んだらしくて此の事は長野の西沢はつがよく知っていた。おとしさんは長じて佐瀬善太郎の妻となつた。此の人は堀川の片六（字は違うかも知れないが、かたろくと呼まれた。）と云ふ網元に生れた人なので、後年はつの兄の佐瀬善八郎が「歌多六」を俳句の号に使つたのもこれに由来するものと思ふ。

おとしさんはよく働くことで評判の人であつた。善太郎氏の早く亡くなつたあと、兄妹二人を立派に育て上げた人であつたが、その人が似ていなくて、その子のはつが伯母分に当る幹に体格などの似ている事を思うと、もつと遠くに伊藤の家とのつながりがあつたのかも知れない。

伊藤の名の出たついでに、伊藤の家のことをまとめておくならば、前に書いたように、伊藤と我が家とは、自分の大伯母悦子が、伊藤富禮の後妻になつた時から親戚関係を生じたわけだ。従つて此の家についてのあまり古い話は聞く事もなかつたが、自分等の聞き知つている程度の年月に生じて行つた事柄だけを取り上げて、此の家は家庭的に単純な明るい空気に終始出来ない因縁を持つていた様である。

この事に此処に私見を挟むならば、これも亦家系を保たんとする故に、個々の人間よりも格式とか縁故とか、財産とか俸祿とか云うものに結びつかんとしたために、今風に云へば第一に尊重されるべき、人が後まわしにされ閑却されて、其処に色々な破綻を生じたものと思はれるの

である。

或は又其の様な因縁を伴つた家である故に夫れにつながる人々が、皆一度は出来ない迄も理想主義の性学へ入つて、単純に救はれようと、ユートピアを夢見たものであつたのかも知れない。「米は何時でも米櫃から出る」世界を夢見たのであつたのかも知れない。

富禮の母の事は前に書いたが、その様な原因から彼は幼くして母に生別した。そして其の後は祖母に育てられたのだという。祖母がいつも「お前は橋の下に捨てられていたのを私が拾つて来たのだ。」と話して聞かせたので、彼は本当に自分は捨て児であつたのだと信じて「その育ての恩を忘れては申訳ない。」と思いつづけて成人したのださうだ。

後年富禮が捨て子の自分を祖母が拾い上げるところにはじまつて、だん／＼に成長して家督をつぎ、袴を着て登城する様になる迄の様子を、直径二寸五分位、堅一尺二寸位の絵巻物に描かせて所蔵していた。

水色緞子の表紙の付いたその巻物は、今も私の記憶に残っている。

その様にして成長した富禮は、立身したのである。緞子でもあるらしい立派な袴を穿いて両刀を携へた写真を残しているが、此の人も亦妻には運が悪く、死別して一子と隼とがあつた。そして後妻に悦子が来たのである。

自分の知つている隼は長身の立派な老人であつたが、老若の差こそあれ、今の映画俳優高橋幸治が、その軽い外斜視の眼つきと云い、尖つた鼻と云ひ、実によく此の人に似ている。(70)

悦子の義子としての隼がどの様にして成長したかは皆目わからないが、後に彼が勉強のために渡佛した事は確実で、其のリヨンで撮つた半身の写真は、かなり後迄我が家にもあつた。

しかし彼は在佛中に精神異常を起して、病院で逆さに吊されたと云う話さへ残っているが、素より見た者のない話だからその真疑の程は何共云へぬ。兎に角送還されて後性学へ入つて、其処で保護されていたので

ある。

リヨンで撮った写真を見る毎に、私が家人から聞かされた事は、その渡佛した事と、発狂した事と、「今は箱根に居る。」と云う事だけであった。その箱根と云うのは前に書いた、施行平の接待茶所の事である。

箱根に預けられた隼は、或る時は跣足で雪の中へ飛び出して困ったと云う話もあったが一応悦子の義子なので、比較的優遇されてそこで静養していたらしい。

箱根の旧道を越える観光の外人(佛人であらう)と立派に話が出来て、田舎の人を駭かしたという話も残っている。

時間的にどういふことになるかわからないが、或る時期には隼も妻帯した。

その妻は後に書く宮田銚女の妹のぶであった。しかし此の人は幹とせつという二人の娘を残して伊藤を出てしまっていた。

私は少年時代のある日に、幹につれられて神田あたりに此ののぶ(性学の中ではおつぎさんという名であった。)を訪れた——と云はんよりも、くつついて行った覚えがある。

其の時から知っている、宮田銚によく似ているナと思って、その顔を見た記憶がある。その頃此ののぶがどういふ生活をしていたのかは今知る由もないが、金杉の伊藤の家に接続した小さな家で、富三と云う男の子を産んだ事を私は知っている。マクリくさい赤ん坊を子供だった私が、恐る恐る覗いたものであったが、此の気のどくな赤ん坊は幾干もなく死んだようだ。これは隼の子ではなかった。此ののぶは川本さんという下宿人を置いていたが、後には足が萎へたようであった。一人でいつか亡くなった。美しい人であった。

その様にして伊藤の血筋は、親の愛に恵まれずに成人した幹もととなる。幹は従兄平三を養子に迎へて長女はやを生んだ。しかし此の二人はうまく行かなくて、平三の離縁を求めて出てしまった事は前に記した通りで

ある。

しかし夫婦は別れても、その義兄やその妻の、幹が「姉さま」と呼んだ私の母達は、一しよのグループに居るわけである。根こそぎ縁の切れた間柄よりも、尚の事工合は悪かったであらう。

はやは伊藤家の一粒種として皆から大切にされたが、その大切にしてくれる人というのはいづれも縁の遠い人で、家につながる人々で血にながる人々ではなかった。従って本当の家庭らしい家庭の味は知る機会がなくて教会関係のあちらこちらに預けられた。

病身ではあったが一番よく面倒を見たのが宮田銚、つまり大伯母であった。

はやを不幸にしたことの第一が両親の離婚であった事は否定出来ないが、今一つの原因は彼女が下総で天然痘にかゝったという事であらう。

その頃はこれを痘瘡とよんでいたが、性学の外来文化を嫌う固牢な考へは種痘さへも敢てしなかった。しかし天然痘はこわいのでおくれればせでもこれは受ける者が出て来た。自分をはじめ種痘をしてもらった時は母や幹と一しよで、その医者は下谷時代にかゝりつけであった大木玄陽という人であったが、その帰りにみんなで寄ったのは池の端の大溝の前にした蓮玉庵というそば屋であった。

其の二階からはその頃はまだ蓮の沢山あった不忍の池や上野の森が見えた。私は鷗外の「雁」をよむと今も七十年前の此の日の事を思い出すのだが、その頃蓮玉庵では茶の代りに、桜の花の塩漬をうかべた湯を出した。

夫れが子供の目に珍らしかった事と夫れを入れて出した小さい湯呑の模様が、銅版画であったと思はれるが、点で描いたような飛んでいる鳥と雲の図案であった事が記憶に残っている。此の図案は当時極めてありふれたものであったので、始終安ものの食器の模様これを見かけたが、その度毎に私はその日の蓮玉庵を思い出した。

其の時にはやも居たのであろうがその記憶はない。もしもその時にはやも一しよであったとしたら、後に彼女が下総で天然痘にかゝったというのはいたいどういいう事になるのであらう。何にしても彼女は運の悪い女であった。

肉親の愛に恵まれなかったはやは、その実父平三の生家である佐藤という家を観念的にたよりにしていた様であった。

夫れ故後に佐藤の家が微禄して、家も屋敷も人手に渡った時は非常にがっかりしたそう。私の祖母の綏に「おばあさん、家がなくなつて淋しいでしょう。」と云つた時、綏が例の調子で「そうでもないよ。」と淡々と答へた時、彼女は「此の婆さんは何と云う事を云うのか。」と思つて、肚が立つたと私の母に語つたとの事である。

醜い顔になつた上、何一つ身辺に温かいものを持たぬ彼女は、性学がすべて明治政府の方針を嫌つたので、学校へもゆけなかつた。

しかし彼女は頭がよくて、独学で何やかや覚えた。程度は兎に角エスペラントを習うなど、云つて居た時もあった。

随分波瀾の多い生活を経たようだが、後に大塚覚太郎という人の後妻になつた。此の大塚氏の二人の子でとも此の継母を大事にしていたので、はじめに彼女にも安らぎのある日々が出来たらしかつたが、老年になると一寸異常な所が出来て、中山の法華経寺へ行つていたり、そこらを放浪して人に迷惑をかけたやうであつた。彼女は母親幹の二度目の夫源三郎などてんで眼中になく、胤違いの妹にちると云うのがあつたので、もつぱら「ちゑの親父」と云う呼び方をしていた。

幹の亡くなつた後の伊藤一族はもはや佐藤とは交際がなくなつたので若干の思い出以外には此の家の関係で書く事もない。

しかし夫れは現在のはなしだから又元へ帰つて実語教時代のつゞきを語る事にしよう。

三才の時引越した家の前住者藤井の一人息子正次が遊びに来、自分も

たまには彼の家へ行つたがその他の近所の子供で一しよに遊ぶ者に小学校へ上る頃迄は無かつたやうに思はれる。

藤井の家は、昔御殿づとめをしたという白髪(72)の御祖母さんと養子に來た福さんという父親と、おしもさんという母親がその家族であつた。彼の祖父であつた棟梁は神楽の面などを彫つて巧者な人であつたやうだが彼の母も家女ではなくいはゞ両貫いであつた。

自分の絵をかきはじめたのは六才位かと思うのだが祖母にたのむと書いてくれたのは簡単な白鷺の線画であつた。これはへمامシヨ入道(73)の様に一つの型として祖母の知つていた唯一の絵であつたが、今一つこれは自分がいつも頼んで書いて貰う絵があつた。夫れは自分が「源ちゃんがおしっこしている所をかいて。」と注文してかいてもらうものである。石灯笼の様に両手両足を踏ん張つてお河童頭の子供が小便をしている姿である。

藤井は自分よりも高級で鎧武者などをかいていた。

自分にも学齡が來て入学の事が問題になり、はじめは根岸小学校へたのみに行つたらしい。所が根岸が満員だという事で断られたので藤井の家に相談した所、藤井の場合はどの様な事情であつたか彼は近い根岸を通り越して入谷の小学校へ行つていたので、そこではどうかと云う事になり早そく入谷へ見当をつけた。もつともその頃にはまだ金杉には小学校は無くて、日暮里の生徒は鉄道の踏切りを越えて、諏訪神社に近い山の上の小学校迄ゆかなくてはならなかつた。

二月生れの私は、当然七歳で入学出来たのであるが、家庭で新教育をさせると言う気持にはつきりふみ切つていなかつたので、一年おくれで八才の春、夫れも四月になつての入学であつた。(73)

校長は金田藤吉先生、受持は小島政一先生と云つた。

既に新学期は始まつていたのだが、此の迂り込み入学に踏み切つたのは、偏へにあの保守的退嬰的な祖母の決断であつた。四月八日の初登校

で、例の丁髷はその前日に床屋へ行って切って貰ったのであった。

夫れを見て「非道いことをしたナ。」と云ったと言うから、祖父為信も根岸の魚屋万平肴屋の前に出来た洋食屋にオムレツやビフテキを注文したり、長崎へ行って外国風な空気を吸って来たとは云へ、やはり昔の夢の断ち切れぬ人であったのかとも思はれる。

後に絵をかく事で自分に関心を持って呉れた大島義濟先生が、此の時受付で事務を執って居て手続をしてくれたが、小学校入学という所で一先づ自分の事を一休みして、弟達のことを書くことにしよう。

竹町から金杉へ移った秋九月の二十日に、弟が生れた。これが源之助である。自分の生れる時の産婆さんは下谷の比較的若い人であったと聞いているが、井上の時の産婆は坂本三丁目の裏側に当るような、笹筒町の、武田つねという婆さんであった。後に三遊亭円蔵の「安産」などを聞くと自分は此の武田つねを思い出したが、その様な関係から後年井上姓になった源之助が、同じく入谷小学校へ入る時には、北豊島郡日暮里村大字金杉では、入学資格に叶はないので、本人だけ此の武田つねの家へ寄留の届を出して入学資格を得たものであった。

源之助の生れた頃は、まだ入江の曾祖母れつが健在で同居していた。夏であつたらうか、源之助が薄べりを敷いて遊んでいた時、お昼だと呼ばれて源之助を抱いた曾祖母は上り口でつまづいて転んだ。

そのために源之助は瞼の上を沓脱ぎ石の角で打って怪我をした。母が医者へ連れて行ったが三針縫ったということであった。源之助三才の時の出来事であつたが此の眉上の傷痕は成人後まで残っていた。

此の日不取敢源之助を井戸端へつれていって、綺麗な水で血を洗ったのは祖母であつたが後に「いくら玉子の白味をつけても流れてしまったが眼をつぶさなくてよかつたと思つた。」と話した祖母は昔風な手痂の手当を心得ていたのかも知れない。

自分と井上とは三つ違いであつた。そして夫れから三年後には源三が

生れた。此の様に自分達兄弟つまり為信にとっては孫達が生れたが、実は母が佐藤の家へ嫁に来たのは母の二十才の時、私の生れた時は母の三十の時だと聞いているから、殆んど孫の出来ると言う事は断念していたのかも知れない。夫れかあらぬか私の生れた時は祖父は非常によろこんで、まだ赤ん坊なのに自分で抱いては散歩に出て、聞かれもない人にまで「これは私の孫です。」と吹聴したという話が伝はっていた。午の年だから陽気なのだとか誰か、評したとの事であるが、明るい性質であつた様だ。

しかし養子がつとまる位だから、細かい所に気のつく人であつたらしい。

祖父の交友はあまり多くはなかつたが、其の様な斜陽階級としては交際家であつたのかも知れぬ。自分のものはつめても義理は派出にすると云う型らしい。当時まだ珍らしくて西洋手拭とよばれたタオルを使用していたが洗ひ晒した祖父のタオルで顔を拭かれると痛かつた。圍碁と海釣が趣味でよく碁の友達が来ては夜を更かした。後年川柳の「小便に起きて女房碁を叱り」という句をよむと子供の時一寝入りした後に眼をさますと、まだパチリパチリ碁石の音がしていた昔の日を思い出したものである。

その様な碁がたきの一人には那須野で除虫菊の栽培をしていた山口という白髪の老人が居つたし粹人成島柳北のやつていた朝野新聞につとめていた植村氏、日本橋の老舗の旦那の穂刈六三郎氏などが居た。此の穂刈氏の夫人は何か玄人上りという感じがしたが、子供のくせに私はそういうタイプの人を好きになれなかつた。穂刈氏と祖父が知り合いになつたのは釣に出て顔を合せる事が度重なつた結果のように聞いているが、その頃九代目市川團十郎も亦釣に来てゐて、よく一しよに成つたという。祖父が日に焼けるのを避けるために用ひてゐた眼出し帽のような型の日よけは、此の頃成田屋の用いているのならつたものであつたとい

う。

祖父のゆきつけの船宿は浅草橋にあった。

朝そこから船頭をつれて沖へ出る。そして夕方人力車で帰ってくる。夫れから魚のわたをぬいて、近所へ配るのが祖母の一仕事であった。時期によって違いは勿論あったであろうが、せいご、かいづ、こち、鱈キスなど、いう魚が主であった。潮騒河豚の皮をむいて茶のみ茶碗に貼りつけて乾かし「カンカラ太鼓」を作ったのもその頃の事であった。

まだ小学校へ上る前のこと、たった一度自分も釣につれて行って貰った事があった。

まだ夜の明けない内に家を出て、途中から人力車を拾ったが、その俵は後にはなくなった、二人乗りの俵であった。

魚の釣れる時の記憶は何もないが、船頭が「此の頃はお濠を掃除したあとのゴミを捨てるので、魚がみんな沖へ出てしまいます。」と話した事をおぼえている。

源三が生れたのは自分が五才の十一月だから、所在がなくて困った自分が祖母に白鷺の画をかいてもらうことをはじめた頃であったと思はれる。

◎

此の一続きの物語は、此処で進行速度が変る事になる。そのわけは最後に書く理由によるものだが。

さて話は又自分の小学校入学の頃に返るが、此の小学生は、入学以前に実語教などを読まされたので、学校という新しい枠へ入って、改めて仮名文字の書き取りなどをさせられると、何だかすぐうたてて困った。

しかし又一面温室から急に露地に下ろされた植物のように、(これは性学の関係でその時代の世間とはなれて生活し、近所の農家とは違った空気の中に成長して居たから、普通の子供の場合の夫れ以上に)世間

の風が馴染にくいものでもあった。

一年の一学期の終った時、自分の成績順位は四番であった。自分の上にいた三人は今もその名を記憶しているが、其の時の二番がたった一人今もなほ年賀状の交換だけは続けている箕面市の三宅静一であった。

其の前後であったと思うが、祖父は東の方の畑を敷地にして、八畳に四畳半の二間に、玄関とお勝手とを付けた小さい家屋を新築した。此の家で祖父は基会所をやるつもりであったらしいが、その内に弱くなってその計画は自然消滅して、祖父は自分の一年の三学期の終る頃に亡くなった。「窮屈な棺はいやだ。」と云ったのでその棺は檜の一寸板の寝棺にし、「火事は嫌いだ。」と云うので先祖代々の墓地に既に土葬を許されなくなっていたから、宮田正高の世話で丸山の本妙寺にゆかりのある日暮里富士見坂下の法光寺の墓地を譲り受けて其処へ葬った。葬式の饅頭マンなどにも祖父の希望があったらしくて、大きなものが配られた。奥州屋が東北弁でくやみを述べて棺前で慟哭した。

父の弟源次郎が上京して、同じ家に棲む様になったのは、夫れからあまり遠くなかったように思う。後に考へると我が家の生活費は急に倍増したわけだ。従兄弟達には、自分と同年の賢一、井上と同年のいと、北角より一つ位下の鉄次と云うのが居た。

此の家の造りは前にも書いたように、大工の親方が自宅に作ったので、入り口の土間から梯子をかけると高い天井裏へ上れる様になって居て、其所がしっかりした物置になっていた。天井裏へ沢山な釣竿をかけた下の古箆筒や長持のそばで、夏などは叔父夫妻が昼休みをしていた。

伊藤左千夫の文筆にある水害(76)は明治四十一年であったと思うが此の家で私は水害にあった。

暫くして叔父一家は、貝塚の北角の家の隣りに引越した。此の家のそばに著述家の藤本藤蔭が居て、何かの折にその人の書いた「列女おふじ」の伝記をもらった事がある。云う迄もなくこのふじは信州飯田の「おふ

じさま」のことである。此の老人は上手に朝顔を作っていた。此の頃になつてこの従弟達は伊藤を名乗つたので、其の前は母方の飯島姓であつたのは、何か叔母の入籍が面倒であつたのかも知れぬ。北角がやつと匍うようになった頃、日暮里の旧宮田邸の広い屋敷の一部に、上根岸にあつた教会の建物が移築された。⁽⁷⁶⁾

其の一部に居た時に北角は僅かの時間母の席を外した際に炉に落ちて尻に大火傷をした。

不取敢行灯の油を患部へ塗つて医者へつれて行つた。という母の話を聞いたが、これは為信の存命中であつたらう。

祖父の死後、新築したきりの家は貸家にして、宮本というインテリの牛乳屋さんに貸した。此の人は渡辺省亭の崇拜者であつた。

伊藤悦子の家では悦子がなくなつて養子が薪屋をはじめた。はやの異父弟妹が生れはじめた。

自分が二年になると一学期交替で級長が任命されることになつた。自分が級長をやる時には、いつも極めて国文学者の木村正辞の孫の正春と云うのが副になつた。私は教師の間にはだん／＼認められはじめたが、半面上級生には小生意気な小僧に見られていたらしかつた。

其の内に何日か父は丁髷を切つていた。父は眼白を飼うのが大好きで棚にはいつも眼白の籠が並んでいた。此の父の唯一の楽しみは後年私が信州へ来た後迄つゞいていた様であつた。

私が庭で遊んでいて、ふと咯血したのは尋常三年の時であつたが、遊びに来て居た岡本徳三と云う同級生が驚いて帰つて行つた。

しかし此の咯血は家族を随分心配させたけれ共一回だけですんだ。福井さんという小児科の医者へ祖母がつれて行つた。

井上は入谷小学校へゆき、北角は日暮里小学校へ上つた。その頃は日暮里も谷中に教室が出来た。

此の頃藤井が絵の稽古をはじめたので夫れに勧められて無声会の大森

敬堂先生の所へ入門した。一月七日の事であつた。

従弟の賢一の行つて居る日暮里の小学校で東京湾へ停泊している、巡洋艦出雲の見学に生徒をつれてゆく事があつた時、一人だけ仲間に入れてくれるように頼んで貰い、沖にいる軍艦迄和船でのりつけて艦内を見せて貰う時、途中で船がゆれるために、皆が酔つて上げている中を歯を食いしばつてとう／＼嘔吐をこらへ通したのも此の頃の出来事であつた。

今大森先生の事をくわしく書いて居られないのは残念だが、先生は本當の意味での画人であつた。その御蔭で私の師事したのは十三の一月から十九の六月迄の間であつたが、純粹に画に志す者の態度を仕込まれたのだと思う。如何に自分を売り出すかなど、云う事には丸つきり関係なしに先生は画の道だけを当時としては新しい考へ方で教へてくれた人であつた。同じ川端門の一人が、自分に関係した新聞記事を切り抜き帖に貼つては人に見せていると云つて笑つて居られた。

大森先生が六月亡くなる頃、私は一人で自炊していた。その家は曾ての我が家の貸家であつたが、私がそこに暮す迄の六年間が普通にある意味での画の修業時代と云へようか。大森先生は肥つて居られた割によく病氣されて、土州橋に近い姉の三浦家に居られたり、向島の中ノ郷に棲まれたりしたが最後には又生家の下根岸へ帰られて其処でなくなつた。告別式の庭で私は平福百穂結城素明など、いう先生の親友の顔を見た。

昔の高等小学校を終つた時先生は「これからどうする。画家で立つなら私などよりも色々都合の好い人もあるから紹介するが。」と言はれた。しかし私にその気はなかつた。

北角渡辺その他親戚の人々はみな画家になる事に反対であつたがさればと云つて明確な代案もなかつたので矢はりぐ／＼そのまゝに先生の所へ通つては作品を見て貰つていた。歯医者になつたらとすゝめられ

て、四谷の大沢へ行つたが一週間で家に帰った。そしてその時大沢へ佐渡から来ていた書生の事を短篇風のものに書いた。その頃に又物置を改造した貸家へ越して来たのが国文の先生で二高をやめて上京した神谷四郎さんであった。

神谷さんの義理の甥にあたる後の川崎小虎氏がその頃上京して美校の生徒になった。神谷さんの養女のきよ子は北角と同じ小学校の同級生になった。二三年すぎて神谷さんは京城中学の教官になって赴任され、我が家は家屋敷を整理して四谷坂町へ移り又間もなく日暮里の宮田の地内にある二階建の三間長屋へ移った。此の時から私は自炊生活に転じたのである。この頃の事は曾て「関谷先生の思い出」の中に書き、夫れに古村青山氏の「子守日記」ののっているのだが、関谷先生にも亦私は大恩がある。私の書庫の中には大森敬堂、関谷楚山、此の二人の先生の写真が安置してあるのだが、もともと危険な此の時代に上手に指導をして呉れて兎も角も自分を七十すぎ迄自分なりに生きて来られる様にしてくれたのは、自分の家庭をのぞいては此の両先生の御蔭があつたからである。その関谷先生に私を引き合せたのもまた藤井正次であった。私と藤井とは性分が合はなかつたけれ共、縁は本当に深かつたのだと思う。世俗的な意味では自分程にも合わせではなかつたらしい藤井の上州の山の中でなくなつた事を思うと何かすまない気がする。自炊生活から関谷先生の教会へと自分が転々している時、井上は府立工芸学校に、北角は渡辺へ引取られて慶応の夜学に、そして登だけが両親と暮して居たのだが、間もなく其の二階に住んだ鍔金の大瀧胤久が独立して仕事をする事になり、その弟子となつて登の鍔金家への一歩がはじまつたのである。

四十三年八月九日

かくて我々兄弟は、皆夫れ／＼の仕事に向つて父の家を離れた。

父の事を思うと、父は一番我が家の家運の傾いた時代の主人として人一倍苦勞し乍ら、誰にも其の苦勞を認められなかつた人であった。婆あ

育ちは三百値が安いと云う諺があるが確に私は婆あ育ちであつた。後に母が語つた言葉に「此の人を育てる時にはまるでおじいさんやおばあさんの子供を預つてでもいる様でした。」と云うのがあつたが、確かに父も母も祖父や祖母に株を取られた形であつたらしい。

今其の祖父や祖母の肩越しに見る様な思い出を書く、其処には丁番の父が、いつでも家庭の主人と云うよりは、教会所へゆく性学の人として思い出される。その中を僅かに点綴して、ある日ある夜の父が浮んでくる。

性学へ入る前の父は一応普通の文明開化時代の青少年で、開成学校とか言う学校へ行つていたらしく後に赤穂の伊那電の支社の前に立つて居た辻新次の銅像を見た時にも、「昔此の人も同じ所にいた。」と話した。⁽⁷⁸⁾

湿版の写真で十六七才と思はれるものを見たが、宗匠頭巾の様な帽子は、ピロウドだと聞いたし、首へ巻いているのは真つ赤な毛糸の襟巻きだと聞いていた。洋傘をついて椅子に腰をかけて白足袋を穿いた眉目秀麗な若者であつた。

父がどの様な縁故で成瀬大域⁽⁷⁹⁾の門人になつたかは知らないが、父の書道の師成瀬先生を尊敬していた事は子供の私にもよく解つた。

父は子供の私をつれて天王寺の墓地あたりを歩く時、よく其所にある碑の文字の筆者の話をして聞かせた。其の頃夫れ等の碑文の筆者には成瀬先生の外に日下部鳴鶴、巖谷一六、隸書の中根半嶺と云うような顔ぶれがあつた。父は時々人に頼まれて板の掛看板などを書いてしたが、其の様な時には長い時間をかけて墨を磨つた。そして又書く時は神経質に慎重に書くので、他から見ても甚だ気苦勞らしい執筆であつた。

この事は無論父の性分から来たものであつたらう。

静岡時代と思はれるが、其の頃の学校の試験といふのは大試験とよばれた進級試験の時などは誰か役人迄出席して（向山黄村など、いふ名を聞いた。）⁽⁸⁰⁾迎も仰山なものであつたらしい。

従って子供にとっては其の試験官からだけでも不尠威圧を感じたわけであつたらう。

父なども試験の前という大騒ぎであつたらしい。しかし成績は良かったらしく、美濃紙五十帖、駿河半紙五十帖という様な褒美を貰つたという話も聞いた。

其の時代の物らしい合衆国史と云う英語の教科書が、たった一冊後迄残っていた。

夫れが何時性学に變つたのかその辺の事は自分には判らないが、以上の話はいずれ父や祖母からの又聞きであつたと思う。

しかし性学へ入つてからも、父の書道と云はんよりは成瀬先生崇拜の気持は變らなかつたらしく、一つ咄として残っている逸話に、千葉へゆくつもりで出かけた所、両国の露店で成瀬先生の手本が見付かつたので、夫れを買つたために旅費がなくなり、徹夜で歩いて行つたという一條があつた。

後に独乙文学の大家になつた、無極成瀬清氏(註)が高等学校の生徒の頃道で逢い、通り過ぎてから「あれが成瀬先生の御息だ。」と話された記憶もある。其の頃成瀬家は上根岸の三島神社と岡野の別荘の中程の所にあつた。

夫れ等の思ひ出に交つて、珍らしく自分が父にねだつて、物を買つて貰つた記憶がある。夫れは尋常三年位の時で、小学校の近所で見かけた俵グミの鉢植えであつた。夫れを欲しいと話した所父はわざ／＼自分を連れて店迄行って呉れたのである。

時代は大分違ふだらうけれ共、父は落語が大好きで、上野の鈴木、坂本の鈴木亭、安楽寺横町の兎亭などへ、よく自分をつれて行つた。

私の落語についての若干の理解は、父の影響によるものと思う。

父は柳家小さんが好きであつたが、其の頃の真打級では、田藏、遊三、鼻の円遊などが居た。燕枝などもよく聞いたが、父には馬楽の啖呵の様

なものに合はぬように思はれた。此の外に夏になると娘手踊りの名で行はれた寄席での女芝居があつた。これらと祖母がゆく義太夫の御さらいとが、私に歌舞伎や浄瑠璃の世界を覗かせた唯一のものであつたと思う。まだ此の外に思い出すのは、夏の末になると近所の空地に掛小屋が出来て、そこで芝居があつた事だ。蝶鯉酒の夕秀の死など、いう芝居を、蛙の飛び出す庭の上で、枝豆を食べ乍ら見る事などあつた。

弟達の方は、自分の様に祖父母に占有される事がなかつたためであらうか、井上は寢床の中で父から岩見重太郎の武勇伝などを聞かされたものらしく、彼の幼い話を聞いていると、その内に父その人と岩見重太郎とが混同してしまふ様な所もあつた。

所詮夫れだけでは一貫し切れない、性学の経済から遊離した歩みについてゆけず、地金と呼ばれていた普通の明治社会へ帰つても自他共に夫れと合流して生きるには不便な条件が多くて、父の五十前後は苦悶の連続であつたと思はれた。もっともこれは佐藤だけではなく、性学時代という共通の思い出を持つ人々の上には皆当てはまる事であつて、早く脱退した者程、物質的には危期を脱し得たと云へたかも知れない。

大正の末になつて先づ井上に孫が出来た。そして翌年の二月には赤穂に佐藤の孫が生れた。老父母はその次の年には赤穂へ来て、子や孫のいる何年目かの自分で建てた佐藤の家に住んだ。

しかし冬になると寒さには閉口したらしく又東京へ帰つて行つた。赤穂での生活は、父が文字を書くには一番快適であつた様子で、此の頃には白唐紙を一反買つて、ほとんどこれを書きつくした。紀代のためにお花やお茶の教授の看板も書いてくれた。

父と母とはまだ壁の上塗りも出来ぬ家でも満足であつたかも知れぬが、しかし年取つて馴れない土地に馴染むと云う事に隠居であるだけに困難であつたらう。

父は性学で草鞋を作る事を覚えていたので何かの折に草鞋を作つた

が、その時始終遊びに来た大工は「此所では藁仕事は普通の者はやりませんから、隠居様にその事を仰しやる方が好いですよ。」と注意した。

母は出がらしになってもいつ迄もお茶を注いで呉れる土地の習慣に閉口した。

其の様な明けくれの中に父と母とは金婚式を迎へた。

恰度三人の子の七五三に該当する十一月の十五日に、私達は家中で五十鈴神社へお参りに行った。父七十四才、母七十才の秋であった。翌年になって、母は時々食事が胸に痞へる様になった。医者は首をかしげた。二人目の医者はすこし年をとっているから癌とは断じがたいとも言った。北角が迎へに来て兎に角東京で診断を受けようと話がきまつた。

北角では晴枝が生れていた。

上京後母の病勢は急速に進行して、五月の末枕頭の芍薬の匂う頃、母は井上の家で亡くなった。

はつきり父に言はなくては、と云う事になり、二三日前に父に母の不起を伝へた時「私もそう思う。これは何共致し方がない。」と答へた父は流石に毅然としていた。

至朗がまだ赤ん坊で、伊藤の叔父を父と見あやまつて匍つてゆく位な時であった。

母がなくなつて後の父は、寒い信州へ帰る事はしなくなった。

母の亡くなった次の年、私は伊北農商⁽⁸²⁾の教師になった。「昔の様な経書の文字は、今の漢文の本の中には僅かしか出て来ませんね。」と父に話したが夫れでも父はよろこんで呉れた。

次の年父は七十七になった。兄弟は合間で座布団と赤い頭巾と袖なしを作つて祝い、北角の家で鈴木種太郎も交へて祝宴を開いた。

赤穂では七十七才になると、その頃は役場で浅井泷先生の書かれた明治天皇の年寄を慰められた歌の石版の軸をお祝いに呉れたので、私は夫

れを持つて行つて床に掛けた。

父の最後に自分に呉れた葉書は印象深いものであった。

夫れは「詩経に螟蛉有子蠛蠓負之とあるが何の事か」と言う意味であった。

云う迄もなくこれはあの似我蜂の事を云つたものである。

父は昔自分が大沢から歯科医になる事をすゝめられた時「或は大沢には大勢娘が居るから、歯医者になれば大沢の婿にされるかも知れない。」と云う様な事を感じたらしく、酔うとその様な事を口にした。

父にとつて私の離れている事は、その頃も淋しかったのであらう。

だから詩経の文句などを持ち出して、その不満を間接に洩したものと思はれるのであった。此の葉書は平凡な言葉のつゞいた最後に突然その言葉がかゝれて終つていた。

父が老衰でなくなる頃には大分戦争もはげしくなつていた。

北角の家で葬式をすませ、分骨して信州へ帰つて後改めて告別式をして、母の葬つてある北の原⁽⁸³⁾へ埋骨して来る夕暮には、二階の電灯の光が洩れると云つて消防から叱言を云はれたものであった。

夫れもこれも忽ち昨日にすぎ去つてゆき、父が亡くなって早三十年すぎた。

母の三十七回忌もそう遠いことではない。

一昨年は子供の生れた年からお世話になつている宮坂詰宗老師に書いて頂いて一族の石塔を北の原に建てた。雪洞夫妻にだけでも、今年は八人目の孫が生れた。

◎

約束したと言う言葉が適當であるかどうか分からないが、はじめに書いたように、此の話は、何となく明治村見学の時以来、執筆の約を果さなくてはならないものとして、未完のまゝ、に気が、りになつていた。

所が明治村ゆきの後篇でも出来そうな人間の勝手な期待は裏切られ

て、今年昭和四十三年の五月二十日に、佐藤井上北角の三人が、京都で落ち合つて洛外の見物をするという計画は、明子の好意も紀代の期待も一挙に覆へる、井上の京都着直前の発病という事でオジヤンになったのである。

内容から云へば、まだ沢山書く事は残っている。しかし今三分の一関係者が減つて見ると、執筆意欲も自から変色せざるを得ないのである。もと／＼云つて見れば楽屋落ちの話ばかりなので、一族の家系と、特殊なニュアンスが何処から来たものであるかと云うことを、若い人達にも知つて貰いたくして書き出した此の話も、そろ／＼お仕舞いにしてよいのではないかと思うのである。

二度目に信州へ来る時（つまり夫れは大正二年の秋、直接東京から伊那へ向う時）旧友の一人加藤鈴之助が、「君は又旅へ出るのだが、よく／＼色んな経験をする様に、生れついて居るんだなあ。」と云つた事を思い出すが、まったくその通りである。

絵の制作年表の外にも、何か生活履歴のメモ位は、畧記しておこうと思つているが、まったくよくも色んな事があつたものだ。何か人間界の出来事に、酔狂な興味を持ちすぎるので、夫れでこの様に話の種の多い一生を、我から招来したのかも考へられるが思へば自分の画室兼書齋が雑然と、さまざまな書籍やら資料やらそして埃やらで充満している姿が、即自分の生感そのものの様である。

しかし品物は兎に角として、実に私は沢山の人から、背負い切れぬほどの世話になつた。

出来ればそれらの人々の片鱗位はかいて、恩人銘々伝にしなければと思ふ事である。

此の次には夫れらの人々の人間像をポツリポツリと書いてゆき度いというのが今の願いだ。

昔お寺の欄間に十六羅漢をかく時に私は曾て世話になつた人々の顔を

思い出し乍らかいた。しかしどうにも十六羅漢では人数が足りないのである。

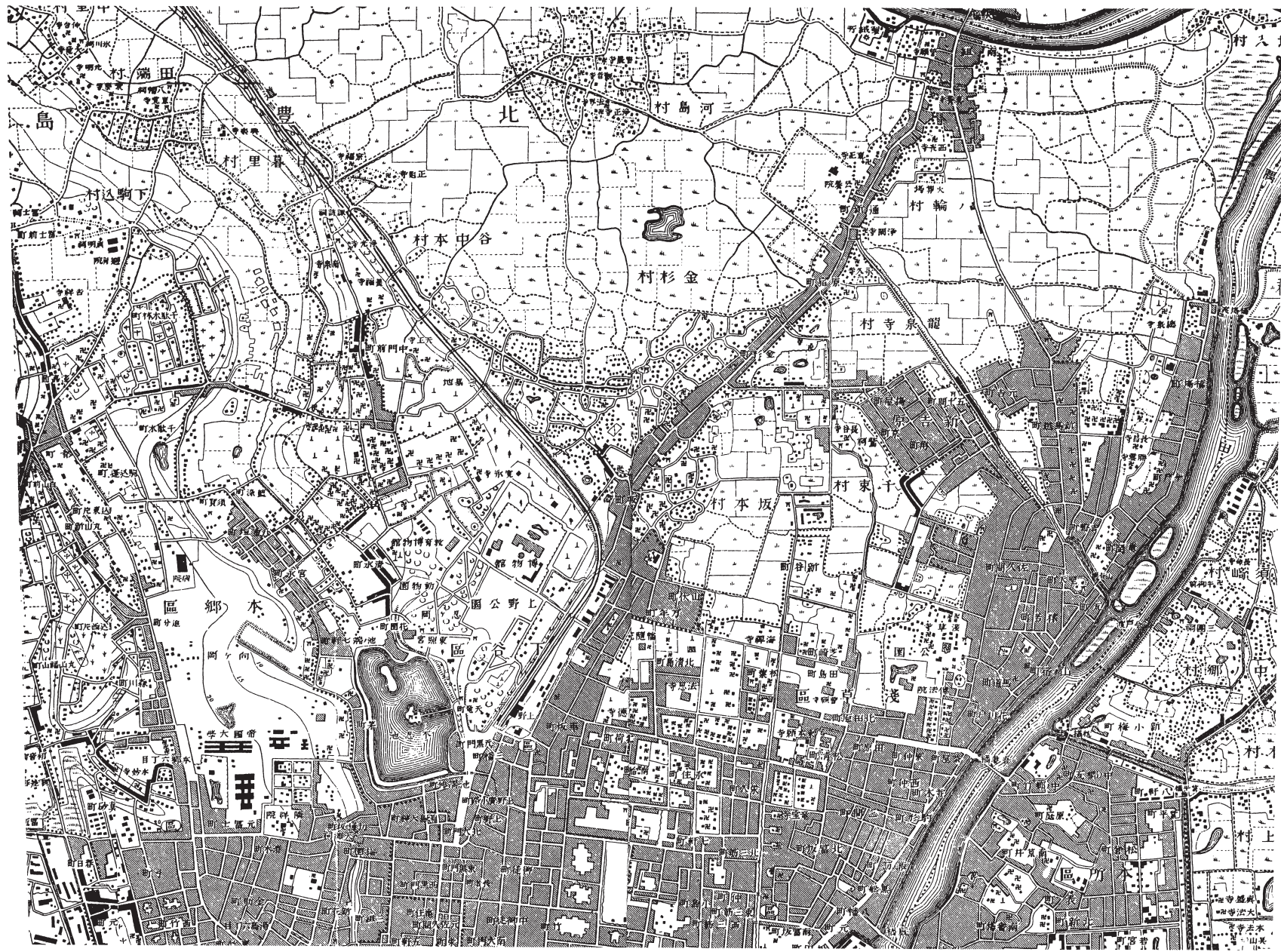
今は遠くの方に光背がつゞいて見えるだけのものもある五百羅漢の行列を想望しながら、このあとの雑記を考へて、夜中に眼のさめた時の時間つぶしにするつもりである。

昭和四十三年八月十日朝

佐藤雪洞の筆録北角源三意匠を加え井上伸一協力佐藤純後援す
百部を複製し三家の縁者に頒つ昭和四十三年秋

本文にゆかり多き地域

明治十三年測量、二万分の一下谷区の部分



註

- (1) 佐藤巳作は、明治十三年(一八八〇)七月一日、神文を提出し性学門人となった。昭和十二年(一九三七)八月二日没、戒名は正覚院穆翁清真居士、諱は方信〔佐藤家歴代法名〕。
- (2) 佐藤為信(銓吉)は、表御右筆北角十郎兵衛の子に生まれ、嘉永六年(一八五三)奥御右筆佐藤源作の養子となった。弘化四年(一八四七)素読出精につき丹後編三反を下賜され、安政四年(一八五七)書物御用出役、文久三年(一八六三)奥御右筆所系譜調出役と歴任した。文久三年時点で三三歳〔江戸幕臣人名事典〕第二巻、同書の銓吉は銓吉の誤り。維新後は駿府に移住、静岡勤番組之頭支配世話役頭取をつとめた〔静岡御役人附〕。明治三十四年(一九〇一)二月二十五日没、戒名は実相院義三為信居士。佐藤家の家系は、信重(甚兵衛)↓信久(甚右衛門、享保四年五八歳没、御勘定)↓信明(助之進・甚右衛門、安永九年七九歳没、御勘定)↓信安(安之助・甚兵衛、小十人)↓政信(富次郎)までが、『新訂寛政重修諸家譜』第二十一(一九六六年、続群書類従完成会、七五頁)に掲載されており、體信(源作)を間に一代はさみ為信へとつながる。
- (3) 佐藤巳作の妻たまは、昭和九年(一九三四)五月二十九日没。
- (4) 佐藤為信の妻綾は、大正七年(一九一八)一月五日没。
- (5) 佐藤源作(源左衛門體信)は、安政六年(一八五九)時点で六三歳、高二〇〇(依内五〇)依足高。大坂御金奉行山本儀山(儀助)の子に生まれ、小十人組佐藤勇左衛門の養子となった人だった。天保十二年(一八四一)表御右筆、同一三年奥御右筆留物方、嘉永元年(一八四八)西丸奥御右筆、同六年本丸へ、といった履歴をたどった〔江戸幕臣人名事典〕第二巻。慶応三年(一八六七)二月二日没、戒名は賢応院耕雲全雄居士。
- (6) 佐藤源作の妻かつは、明治十六年(一八八三)一月二日没。明治一〇年(一八七七)六三歳の時、東京での性学修行に参加していた記録がある。
- (7) 明治六年(一八七三)八月現在の静岡東鷹匠町の屋敷地所有者の一覧中に、佐藤為信の名は見出せない〔前田匡一郎「駿遠へ移住した徳川家臣団 第四編」、二〇〇〇年、私家版〕。ただし、大区小区制時代に作成された「静岡士族名簿」(静岡県立中央図書館所蔵)には、第四大区五小区の静岡鷹匠町最寄を本籍に、六口を給される東京寄留者として彼の名が記載されている。
- (8) 明治九年(一八七六)の官員録では、工部省電信寮少属の「シツオカ 佐藤為信」と記載されている。
- (9) ウェートとは、明治五年(一八七二)一月、工部省が電信機のオペレーターとして雇ったイギリス人五名の一人、フレデリッキ・ウォールド(高橋善七「お雇い外国人⑦通信」、一九六九年、鹿島研究所出版会、三二頁、五三頁)のことであろうか。
- (10) 入江進八郎は、紅葉山樂人東儀隼人佑の子に生まれ、御天守番入江三平の養子となった。天保二年(一八三一)部屋住より天文方測量御用手伝に採用され、翌年家督を継ぎ、以後、天保九年(一八三八)御勘定吟味方改役並出役、同一二年(一八四二)御勘定吟味方改役といった経歴をたどった〔江戸幕臣人名事典〕第一巻。
- (11) 正藏院は、現在も東京都新宿区神楽坂に所在するが、入江という檀家も同家の墓石も存在しない。戦災のため古い過去帳は失われており、確認もできない(同寺住職より聞き取り)。
- (12) 入江春重は、明治十三年七月一日神文を提出、性学門人となった。
- (13) 上の原(上ノ原)は、維新時に旧幕臣が集団移住した地であり、遠江国敷知郡岡崎村(現静岡県湖西市)のこと。
- (14) 山口安貞は、山口安定が正しい。彼は遠州三方ヶ原(現浜松市)に住んだ静岡県士族であり、明治十五年(一八八二)四月八日神文を提出し性学門人となった。
- (15) 現在、清光寺(東京都台東区西浅草)には江戸時代に建てられた北角家の墓石は存在しない。北角家の家系については、春可相祐が徳川家康に召し出され御数寄屋坊主をつとめ、その後六代を経て勝有(久琢)↓茂棟(松之丞、寛政八年正月二六日六五歳没)↓資順(仙次郎)と続いたことが『新訂寛政重修諸家譜』第十八(一九六五年、続群書類従完成会、三四三〜三四四頁)に掲載されている。勝有は奥坊主組頭、茂棟は御勘定、資順は御徒目付をつとめた。
- (16) 北角十郎兵衛(後に十郎と改名)は、表右筆や奥右筆を経て、静岡藩では藩庁掛書記となった。本文には諱が「為直」であったとするが、千葉県香取市の婦命台地区墓地に残る修立の母の墓石では「修明」となっている。
- (17) 伊藤隼のフランス留學については、拙稿「大原幽学没後門人と明治の旧幕臣」においてその可能性を指摘しておいたが、本文のこの記述によってそれが裏付けられた。また公文書の上では、外務省外交史料館所蔵「海外旅券勘合簿 本省之部 第一巻」(明治六年一〜二月)に左記のような記載が見つかった。
 八年三月廿日返納 東京府貫属士族 神奈川県権典事
 三月十七日
 自 第百十三号 仏国歴覧 富禮長男
 伊藤隼 廿三才三ヶ月
- (18) 伊藤隼の妻のぶは、宮田菅太郎の娘であり、兄弟姉妹には宮田銚、宮田正高がいた。内山處謙(明治十三年七月一日神文提出)も兄弟だったというのは新知

- 見である。前掲「静岡士族名簿」には、六口・静岡鷹匠町最寄・東京寄留として宮田正高、五口・鷹匠町最寄・東京寄留として内山處謙が記されている。
- (19) 山下新太郎(一八八一〜一九六六)は、東京美術学校西洋画選科卒、フランスに留学し、二科会や一水会の創立に参加した洋画家。
- (20) 伊藤悦子が東京教会の実権を握っていたことは、会計書類の存在などから類推し、拙稿「大原幽学没後門人と明治の旧幕臣」でも言及しておいた。
- (21) 伊藤源三郎(一八七九〜一九五八)は、宮内助右衛門の子ではなく、性学門人の山本助右衛門(現千葉県香取郡東庄町夏目の人)の次男であり、明治三五年(一九〇二)幹と婚姻、三七年(一九〇四)隼の隠居後に伊藤家の家督を継いだ。
- (22) 拙稿でも触れておいたように、黒部忠英の旧名は「健八郎」であり、そのため「ケンさん」と呼ばれたのであろう。前掲「静岡士族名簿」には、六口・静岡鷹匠町最寄・東京寄留として黒部忠英の名がある。
- (23) 千葉県香取市帰命台地区の性学墓地には、明治三年(一八九〇)二三歳で没した北角修立の妻「佐藤氏安子」の墓が現存する。名前が食い違っている理由は不明である。
- (24) 拙稿で触れたように、北角修立の旧名は「久次郎」といったらしい。修立は明治三六年(一九〇三)四月二日没、戒名は善修院満誓誠諦居士(北角晴男氏所蔵過去帳)。
- (25) 明治二年(一八七九)の官員録では、黒部忠英は工部省電信局十等技手補となっている。
- (26) 宮田温は、拙稿「大原幽学の教えを学んだ旧幕臣列伝」でも触れたように、開拓使仮学校や慶応義塾に学んだ人物であり、英語に通じていたものと考えられる。
- (27) 渡辺房とは、明治十五年(一八八二)二月一七日に神文を提出した修立の弟北角十三郎と同一人物かもしれない。
- (28) 渡辺章(旧名幸之助・護郎)は、文久元年(一八六一)一月六日に神文を提出した性学門人。
- (29) 井上元七郎胤隆は、旧名を与市といい、安永二年(一七七三)西丸御広敷御用部屋定住雇となり、天保二年(一八四一)御広敷御用達、嘉永五年(一八五二)御林奉行と歴任、嘉永三年(一八五〇)二月には御目見以上となった。『柳宮補任』には、安政三年(一八五六)八月一七日老衰につき御林奉行を御免となり、金一枚を下賜されたとあるが、井上家過去帳では安政二年(一八五五)八月四日一〇一歳で亡くなったと記されている。いずれにせよ、一〇〇歳を越えても現役だったことになる。戒名は真如院殿著善仙翁居士。嘉永六年(一八五三)時点での八〇歳以上の高齢者二五名を載せたり「御旗本長寿調」にも九九歳の彼の名が記載されており、「氏家幹人『悠悠自適老侯・松浦静山の世界』、二〇〇二年、
- 平凡社、五九頁)、有名人だったらしい。
- (30) 要伝寺は東京都台東区根岸に所在し、元和元年(二六一五)井上家を開基として創建されたとされる。ただし、この井上家は、天保期に勘定奉行をつとめた井上備前守秀栄(三郎右衛門・備後守、清忠院殿法性體山日勇大居士、弘化四年三月一七日没)の家のことであり、元七郎の家はその分家らしい。
- (31) 井上信濃守とするのは誤り。井上義斐(元七郎・主水正・備後守・如水)は、寄合木村陣翁(平九郎)の子に生まれ、井上元七郎胤隆の養子となり、箱館奉行支配組頭・御目付・大坂町奉行・外国奉行・作事奉行・留守居などを歴任、維新後は日光県大参事・群馬県参事・宮内省九等出仕・大蔵省五等属などをつとめた。明治四年(一八八一)五月一八日、六五歳で没、戒名は静鑑院殿如水日明居士。川路聖謨の弟で、下田奉行・外国奉行・軍艦奉行・勘定奉行などを歴任した井上信濃守清直(一八〇九〜六七、新右衛門)は別人である。
- (32) 『アサヒグラフ臨時増刊 写真百年祭記念号』(一九二五年、朝日新聞社)のこと。井上源之助氏所蔵として「御目付役井上源七郎氏 元治元年江戸築土下自宅にて撮影せる湿板写真」が掲載されているほか、巻末の出品目録には、他に「井上如水氏肖像(湿板) 明治六年一月浅草蔵前内田九一氏写、井上如水氏肖像八ツ切り印画紙」などがある。ただし、いずれもその後の戦災により現在は失われているとのこと。同じ「御目付役井上源七郎」の写真は、「石黒敬七『写された幕末 1』(一九五七年、アソカ書房)、『写された幕末 石黒敬七コレクション』(一九九〇年、明石書店)にも掲載されているが、原版が石黒コレクションに所蔵されているわけではなく、『アサヒグラフ』掲載写真を転載したものではないかと推測される。
- (33) 細谷安太郎(一八五一〜一九二二)は、横浜語学所生徒出身で幕府陸軍の砲兵差図役勤方をつとめ、箱館戦争に参加、維新後は海軍省一等属や高田商会パリ支店長をつとめた。本文によればその父細谷喜三郎は木村家に生まれた人で、井上如水の兄弟だったことになる。ただし、後述のような雪洞に誤解があるとすれば、木村家は山木家、如水は元七郎義通の取り違ひということになる。なお、細谷安太郎には、「伯父が武内下野守に従つて箱館へ行って西洋酒を贈つてよこした」云々という回想があるので、「かふる」「細谷翁の昔話」「同方会誌」36)、この伯父が箱館奉行支配組頭勤方として箱館奉行竹内下野守保徳の部下だった井上如水のことであるとすれば、この記述は正しいと言える。
- (34) 河津祐賢(一八四二〜一九一七)は、旧名を三郎太郎といい、河津伊豆守祐邦(稜威)の養子。幕府陸軍の砲兵頭並を経て、維新後は沼津に移住し静岡藩沼津勤番組一番頭取となり、その後新政府に出仕、陸軍砲兵中佐となった。本文によれば、木村家に生まれ、河津家の養子に入ったとされるが、祐賢の実父は山木五郎左衛門である(『江戸幕臣人名事典』第二巻)。また、「山木五郎左」を実父とす

るのは、如水の養子井上元七郎義通のほうである（井上家過去帳）。つまり、兄弟だったのは、山木家に生まれた河津祐賢と井上元七郎義通のほうであり、雪洞は二重の勘違いをしていることになる。

(35) 河津暹（一八七五～一九四三）は、東京帝国大学経済学部教授、法学博士。河津祐之の子に生まれ、大正六年（一九一七）伯父祐賢の家督を継いだ。

(36) 岡田のぶは、慶応四年（一八六八）三月岡田忠良（顕次郎）に嫁ぎ、明治一四年（一八八二）四月離婚、二八年（一九九五）四月二八日死去。戒名は一如院妙心日融大姉（井上家過去帳）。

(37) 岡田忠養（安房守・備後守・利喜次郎・茅洲）は、下田奉行・小普請奉行・製鉄所奉行並・作事奉行・勘定奉行などを歴任した。

(38) 岡田忠良（顕次郎）は忠養の子で、維新前は横浜語学所生徒であり、慶応元年五月開板「御進発御用役人附」には歩兵差廻役として掲載、静岡藩では沼津兵学校第三期資養生となった。弟岡田六郎は明治一三年七月一日神文を提出、また妻のぶも性学の修業に参加したが、忠良本人は入門していない。

(39) 大沢九重郎（一八六二～？）は、山梨県の人、利兵衛の次男で、東京で歯科医師を開業した（『明治人名事典』上巻、一九八七年、日本図書センター）。

(40) 本光寺は、現在は静岡県沼津市本字千本にあるが、当時は市制施行前、かつ移転前であり、駿東郡沼津町八幡町に所在した。井上元七郎（義通）は、文久三年（一八六三）部屋住より小十人格大砲差廻役頭取方に召し出され、後に両御番格大砲差廻役頭取、工兵頭に進み、駿河移住後は陸軍生育方八番類取締となったが、明治二年（一八六九）八月一八日沼津で没。戒名は大教院殿元道日暹居士。その墓石は、無縁墓の固まりの中に現存する。同寺過去帳には、「徳川家生育取締井上元七郎事 二十九才」と記されている。また子孫宅に伝来したガラス板写真（井上敏子氏所蔵）の箱書に「井上政五郎義道 元治元甲子暮秋於皇都写之」とあることから、元七郎を襲名する前は政五郎が通称だったことがわかる。

(41) 沼津の大火は、大正二年（一九一三）三月三日のこと。

(42) 田尻稲次郎編『幽学全書』（一九一一年、同文館）。

(43) 正確には、美土路春泥「東京の丁番宗」（『探検世界』第四卷第一号、明治四〇年九月五日発行）のこと。参考のため、本稿末尾に掲載しておく。美土路春泥（昌一、一八八六～一九七三）は、早大卒、東京朝日新聞社に入り、編集局長などを経て、戦後朝日新聞社社長。

(44) 下田将美「八石教会の跡」（『中央公論』第四二年第三号、一九二七年三月）のこと。後に下田将美著『東京と大阪』（一九三〇年、中央公論社）に収録された。

(45) 高倉テル『大原幽学』（一九三九年、東邦書院）のこと。

(46) 飯田伝一『大原幽学の事績』（一九三四年、財団法人八石性理学会）のこと。

(47) 伊庭家について、雪洞は別の著書で、「我が家の親戚で、星亨を暗殺した、伊

庭想太郎の一族」（佐藤雪洞『翁草』、一九七九年、馬場鉄雄発行、二一四頁）と記しており、拙稿「大原幽学の教えを学んだ旧幕臣列伝」で推測していたことが裏付けられた。

(48) 悦子の夫伊藤富禮（岩一郎）は、明治九年（一八七六）六月七日没。

(49) 宮内与惣治は東京本所相生町の人で、明治一五年（一八八二）四月八日神文提出。

(50) 子規庵は、病室兼書齋として明治一七年（一八九四）以来使用された正岡子規の旧居。東京都台東区根岸二丁目五番一―号。

(51) 中村不折の旧宅は、現在、台東区立書道博物館（台東区根岸二丁目一〇番四号）になっている。子規庵の向かい側。

(52) 大原幽学記念館に残されている神文に佐藤為信のものはなく、彼が正式に入門しなかったことが裏付けられる。

(53) 遠藤亮規が権大講義、石毛源五郎（規方）と鈴木英三が訓導に任命されたのは明治五年（一八七二）九月。

(54) 安政五年（一八五八）三月八日に自刃した大原幽学の検屍にあたっては、代官佐々木道太郎の手代加藤泰輔が赴いている。加藤は幽学の見事な自刃ぶりに感動し、名主の江戸呼び出しなど、これ以上村の失費がないよう取り計らうとの好意を示した。

(55) 鈴木栄蔵は、鈴木英三の誤り。鈴木英三は下総国香取郡溝原村（現千葉県旭市）の名主をつとめた家の人で、石毛源五郎の盟友であり、教団の実力者だった。

(56) 飯島八十八は、下総国海上郡足川村（現旭市）の人。幽学以来の性学門人で、明治六年（一八七三）二代目教主遠藤亮規の箱根湯治に同行した際、国事犯事件で逮捕された。

(57) 石部は、現在の滋賀県湖南市。

(58) 普通、「接待茶屋」と呼ばれる（『三島市誌』下巻、一九五九年、九〇二～九〇五頁）。現静岡県三島市に位置し、少し移転したものの昭和四五年（一九七〇）まで国道一号沿いの場所が続いていた。明治一二年（一八七九）に鑄造され、接待茶屋で使用された銅製の茶釜が三島市郷土資料館に保存されている。

(59) 林嘉十郎は香取郡錦木村（現旭市）の人で、万延元年（一八六〇）一二月一―五日神文提出。

(60) 岡田新四郎は香取郡府馬村（現旭市）の人で、明治四年（一八七二）一二月一―七日神文提出。

(61) 松翠堂と呼ばれた根岸の教会が焼失したのは明治一七年（一八八四）一月三一―日夜六時半時であった（大原幽学記念館所蔵・大原幽学関係歴史資料Ⅳ 46）。

- (62) 火野葦平「糞尿譚」は、昭和十二年(一九三七)雑誌『文学会議』に発表された作品で、芥川賞を受賞した。糞尿採取業を営む主人公が糞尿をぶちまける場面がある。
- (63) 茶樹抜探事件は明治十三年(一八八〇)に起こり、裁判沙汰になっている(木村健編『大原幽学とその周辺』、一九八一年、八木書店、七四〇～七四二頁)。
- (64) 釈宗活(一八七〇～一九五四)は、江戸の蘭方医入沢海民の三男に生まれ、釈宗演に師事、アメリカに伝道した。彼が東京谷中に開いた両忘庵には多くの貴顕が参禅した。
- (65) 為信の三男佐藤平三は、明治一八年(一八八五)二月一七日神文提出。
- (66) 鈴木孝三郎は、下総国香取郡溝原村(現旭市)の人で、明治十一年(一八七八)二月一七日神文提出。父利右衛門、兄弟孝太郎・孝五郎・孝七郎とともに性学門人であった。
- (67) 子どもを他家へ預け、一人前に育てようという「預り子」「取替子」の制度は、大原幽学の生前から始められていた性学特有の教育法である(高橋敏『大原幽学と幕末村落社会』、二〇〇五年、岩波書店)。
- (68) 新見正寿(一八五六～一九一〇)は、下総国で五二〇石を領した旗本。明治十三年七月一日神文提出。葭阜と号し、画をよくしたようである。
- (69) 遣米使節正使をつとめた新見豊前守正興のこと。
- (70) 伊藤富禮の写真は拙稿「大原幽学没後門人と明治の旧幕臣」に掲載しておいたが、袴に両刀を携えた姿であるので、同じ写真のこともかもしれない。
- (71) 伊藤隼の肖像画は前掲拙稿に掲載。
- (72) ヘムムシヨ入道は、片仮名の「ヘムムシ」の四字で書いた人の横顔に、「ヨ」で耳を付け、「入道」の草書体で体を描いたもの。
- (73) 佐藤雪洞の東京市立入谷小学校入学は明治三十三年(一九〇〇)とされる(前掲『翁草』、卷末経歴)。
- (74) 現在、「佐藤為信之墓」は佐藤家の菩提寺である東京都文京区向丘・大円寺に移され、信重・信久・體信らの墓石とともにある。
- (75) 伊藤左千夫の写生文「水害雑録」、短歌連作「水害の疲れ」はともに明治四十三年(一九一〇)発表であり、その年八月の水害を題材としたもの。
- (76) 日暮里の旧宮田邸に移されたという八石教会の場所は、現在の東京都荒川区西日暮里三丁目あたりか。
- (77) 大森敬堂(一八七六～一九一一)は、川端玉章門下の日本画家で、明治三十三年(一九〇〇)同門の福井江亭・渡辺香涯・結城素明・平福百穂らとともに自然主義をうたって无声会を結成した。雪洞が大森に入門したのは明治三十八年(一九〇五)一月『翁草』、卷末経歴「伊那路」第四二七号、一九九二年、上伊那郷土研究会)。

- (78) 辻新次は、幕末には開成所教授手伝出役、維新後は大学南校少助教、南校校長をつとめた。佐藤巳作は、幕府の開成所に学んだ履歴を持っていたのかもしれない。雪洞は、「父は、其の頃何を感じたのか、東大の前身であった学校を中退して、尾張の浪人大道寺才次郎(大原幽学)が下総に作った八石教会へ入って、後年武者小路実篤が、宮崎県に作るうとした、『新らしき村』の如きグループに入っていた可能性もある。
- (79) 成瀬大域(一八二七～一九〇二)は、遠江国小笠郡日坂(静岡県掛川市)出身の書家で、宮内省に奉職した。
- (80) 大試験という進級試験や向山黄村の名前が登場することから推察すると、佐藤巳作は静岡藩時代には静岡学問所の生徒だった可能性がある。
- (81) 成瀬無極(一八八四～一九五八)はドイツ文学者、京大教授、文学博士。
- (82) 伊北農商学校のこと、現在の長野県辰野高等学校。
- (83) 長野県駒ヶ根市赤穂にある北の原墓地のこと。

【参考】

東京の丁髷宗

美土路春泥

世間には随分変つた宗教も多いが、丁髷宗といふのは其中でも格別風変りな方である。全体此宗旨の者は男は老若を問はず悉く丁髷を戴いてゐるのが此名の起つた所以で、真実の名は性理教といふのだが、外の人は何れも丁髷宗々々と呼んでゐる。

場所 は日本に三ヶ所もあるが記者の見たのは東京府下日暮里村ので、上野から汽車で行くと田端で下車して、十余丁左に這入つた処に、街道に沿ふて黒塗の板塀がある。彼等はその附近に固まつて住居してゐるので。夫等の宗徒の中には味噌屋もあれば醤油屋もある。百姓もあれば官吏もあるが、近所で一番名高いのは俗に丁髷炭団と云つて値段の格安なのと正直なのとで評判の炭団屋である。

抑此教の起原 と云ふのは天保年間信州上田の浪士大原熊嶽といふ人が始めて開いたので、それが次第に拡がって、中々侮り難い勢力となつ

た。処が他宗の嫉妬の爲めに切支丹婆天連といふ評判を立てられ上田を追放の運に逢い、下野に來りて此処に又子弟を集めて其教を説き六十七歳で此地に客死した。それから二代目の人は又信州の上田に布教して其地に死し、第三代が目下の教主で、其生れ在所は、下総香取郡の農夫の息子で、師の死後今日に至るまで三十四年間、信州、総州、東京の三箇所を巡歴して熱心に布教に従事してゐる。

其教ゆる所 は日本古來から伝はつてゐる神教を基礎とし、これに儒仏の神髓を加味した教へで、大学、孝経、中庸など基礎とした上に教主の信仰を加へた性理学といふものを教へるのである。だからして先づ仁義忠孝の教と見て大差はあるまい。然しながら随分其日常の儀式に就ては他の宗教とは異なつてゐる。もし其宗徒の中で、

出産 すると、小前屋といふに届け出る。と其人が名を付けてやる。それから一年の間は親の手許に於て育てるが生れて二歳になると同宗の人の処に預けて養育して貰ひ二三年そうして又生家に帰らせる。そして男は十五歳、女は十三歳になると其年中の行状を調査して其年十二月小前屋が又烏帽子親となつて元服せしめるのだ。そして子供の中は決して砂糖を食はせない。これは別段深い意味があるのではないが、それを禁じて以來小兒に有り勝の驚風病が全く其痕を絶つたと云ふ事である。

其結婚の方法 も中々面白い。其宗門に居る人々は決して自由に結婚することは出来ない。それかと云つて本人のみならず両親と雖、独断で取纏める事は出来ないのだ。其撰択の権は悉く前に云つた小前屋に存じてゐるのだ。宗門中に妙齡の者があると小前屋が相談して取り極めて、其旨を両親及び本人に告げる。此場合決して異議を唱へる事は出来ない。そして愈其話が極まると、所謂黄道吉日を撰んで、愈

結婚式 を挙げる。依然随分贅沢な儀式もあつたさうだが、人々の氣風が日に奢侈に流るゝのを恐れて、今では媒介者が一人付き添うて新郎の家に赴く事に極め、嫁御寮は身道具を入れた風呂敷包を小脇に抱い

て従いて行くのだ。そして其婚姻の料理なども頗る質素手輕を極めたもので、冬ならば雑煮の馳走夏ならばしんこ雑炊でやる。で三々九度の盃の場合になると花嫁は新郎の前で、盃一つ毎に誓を立てる。それは父母の恩を忘れず。良人の言に負かず。貞節を固守すると云つたやうに総て九箇條の誓約があるのだ。で女は生れると結婚するまでは決して剃刀を顔にあてられないので、新婦は此時始めて剃刀をあて、齒を染め、丸鬢に結ふて初めて一人前の女となるのである。次で

葬式 は仏葬にする。人若し死亡するときは其階級に応じて正服を着せしめ、会葬者は一々生ける人の如く死人に訣別の辞を述べて扱て愈埋葬するのであるが、棺は必ず甕を用ゆること、なつてゐる。

彼等が日常の行 は何うであるかと云ふに、別段に礼拝するでもなく又経文を唱へるでもない。男は所謂丁髷に結つてそれを毎朝結い直す。全体彼等が丁髷に結ふのは大いなる理由があるので、其教に依ると鬢の鬢は人の心を司るものであるからしてそれを堅くめておれば自然心も引き締つて行状が正しくなるといふのだ。女は又毎朝身繕をする。で頭にあるもの又一々心に關する教訓が含まれてゐる。笄は鬢を緩めざる爲のもので男と同じく道心を堅固にする爲、簪は父母の訓を戴いてゐるので毎朝それを挿す度に父母の大恩及び其訓を思ひ浮べ、櫛は髪を筋を整へて一糸乱れざらしむる爲のもので即ち心を正しくすると云ふ工合に、別段に他の儀式は行つてゐないけれども身に着いてゐるもの悉く彼等に取つての訓なのである。そして毎月一回宛行状月合と云ふ事をやる。男子は十一日女子は廿二日が其定会日で、其日彼等は定められた場所に集つて、前の一月間に於ける彼等の行状を調べられるのでそれが済むと教主から一場の説教があるのだ。だからして彼は日々其行を慎んでよく其教を遵守してゐる。

食物 に就ては別段に禁じられてゐる処はないが。旧慣上四足獸は食はない。それから鶏は人に時を教ゆる益鳥であるからといふのでこれも

決して食はないのだ。

要するに此宗教は頗る保守的なもので、古代からの習慣を守つて、滔々たる時勢の潮流に投じないといふ事を第一としてゐる。そして少しでも現代の文明とか或は新らしいものに心を移すやうな事があると、彼は是を以て其心が既に浮華に流れ軽佻に趨つた兆だ云つて非常に忌み恐るゝのである。

〔探検世界〕第四卷第一号、明治40年9月5日発行〕

※ なお、原誌には、「老人生理学の講義を聞かす」「丁髷宗小児の炭団製造」の二つの挿画が付されている。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(二〇〇九年七月二十九日受付、二〇〇九年九月二十五日審査終了)